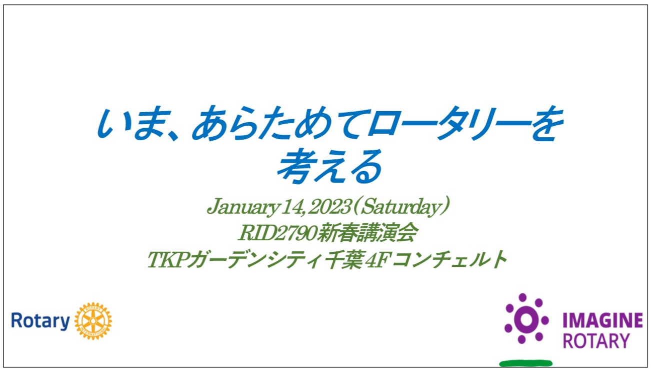
国際ロータリー第 2790 地区研修系三委員会主催

新春特別講演　「いま、あらためてロータリーを考える」

元国際ロータリー理事　松宮　剛（茅ヶ崎湘南 RC）

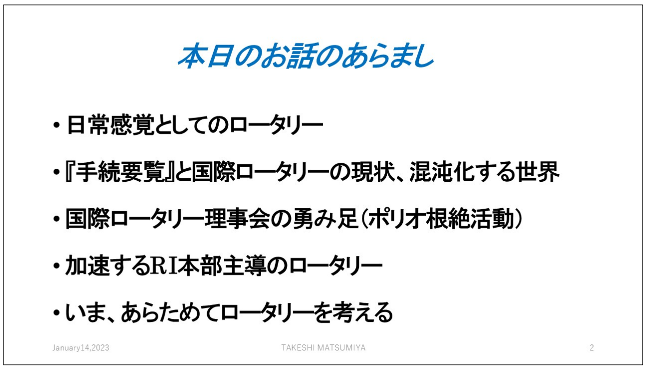
2023 年 1 月 14 日　　於　TKP ガーデンシティ千葉 4F コンチェルト

皆様、こんにちは。そして、明けましておめでとうございます。なかなかこのおめでとうという感覚が、私の胸に、しっかり落ちないという昨今の世界の情勢の中で、可能であればめでたい年になればと願っております。今日、お招きいただきましたのは、小倉純夫ガバナーのご厚意に拠っています。お陰様でこういう場所に立たせていただいております。さらに、昨年の 5 月になると思うのですが、得居パストガバナー、山下さん、それからそこにいらっしゃる平野さん、若い会長である遠藤さん、4 名が茅ヶ崎にお見えになって、それで、この日と講演が決まったということです。私は、常に思いは溢れているのですが、語りは下手で、皆様の何か益になるようなお話ができるかどうか非常に不安ではありますが、なんとか、自分なりに一生懸命務めたいと考えております。



Slide 1

それでは、始めましょう。「いま、あらためてロータリーを考える」ということ、これが全体のタイトルでもありますし、後半では、具体的に何をどう考えるのかというお話も交えていきたいと思っています。



Slide 2

本日のお話のあらましですけれども、

・日常感覚としてのロータリー

日常感覚としてのロータリー、というのは、皆さん方全員にとって共通しているとは言えないと思うんですね。

ですから、象徴的にいえば、入会 3 年未満くらいのロータリアンの方がロータリークラブに対してどんな感覚をもっているのかという、そんなお話をスタートでしたいと思います。

・それから、『手続要覧』と国際ロータリーの現状、混沌化する世界

『手続要覧』と国際ロータリーの現状というと結びつきが悪いかもしれませんが、この『手続要覧』、今年のものは皆さんお持ちでしょうか？　冊子として、RI は出さなくなったんですね。ですから、皆さんダウンロードして見て頂くということになりますが、かつての冊子に比べますと本当に薄くなりました。内容が濃くなったとも思えません。ただ、昔から見てきた『手続要覧』の厚み

や内容を見ることによって、国際ロータリーの方向性がかなり鮮明に分るような気もいたしますので、そういった点で『手続要覧』というものをひとつの手掛かりに、ということです。で、ここが一番大変なのですが、先程も申し上げましたが、非常に混沌として、世の中、何が正しくて何を頼りに日々を暮らしていったら良いのかという根本が崩れているような、そういう感覚すら持たれる日々だと思うんですね。コロナが始まって、パンデミックになって 2 年半余りですか。で、終わらないかもしれません。さらに、別のウイルスによるパンデミックが続けて起こるかもしれない。非常に確信のもてない、私自身、75 年生きてきたけれどもこういう時代に遭遇するとは思ってはいなかったので、皆さんとどの程度共有できるかどうか分かりませんが、若干そういう話にも触れたい。

・国際ロータリー理事会の勇み足（ポリオ根絶活動）

その次は、過去形のお話になりますが、1978 年に起きたことです。これは、２回目の国際大会が東京で開催された年ですね。そこに、ちょっと勇み足ということを書いていますので、そんなことに触れたい。

・加速する RI 本部主導のロータリー

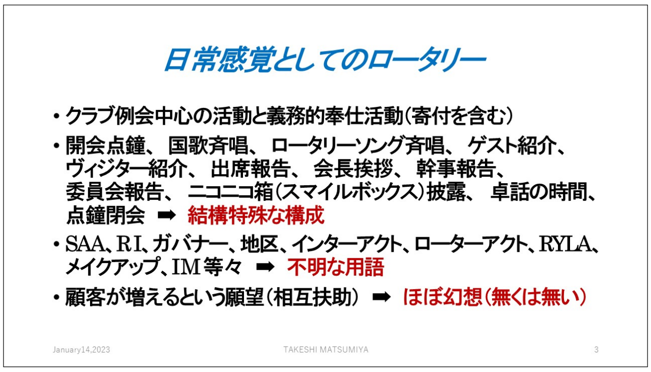
皆さん、我々とこう、感覚が同じかどうか分かりませんが、加速する RI 本部主導のロータリーということを私日頃強く感じているものですから、そういった具体的なことに触れて置きたいと思います。

・そして、いま、あらためてロータリーを考える

で、最後は、今日のタイトルであります、「いま、あらためてロータリーを考える」皆さん方と考える。私は、私なりの考えを申し上げますけれども、これが正しいと言うものでは全くありません。様々な思いが皆さんにはおありな訳ですから。

そういうこと、このセミナーをきっかけにあらためて考えて頂きたいなと。それぞれのロータリアンやロータリークラブがこれからいかに展開していくのかということについて、積極的な、能動的な考えをお持ち頂ければ、私がここへ来たことの意義の大半が果たされるという気がいたします。

一つ、どうしても気になっております。この看板の元 RI 理事という文言だけは、非常に私にとっては邪魔で、これがあると話にくいということではないのですが、ただ、自分の名前の前に付く言葉としては非常に相応しくないので、出来るなら、松宮さんという感覚で皆さんと 2 時間余り過ごしたいと思っております。



Slide 3

先程言いましたように、新会員、入会されて 3 年くらいの方が一番感じていると想定して良いロータリーの感触のお話ですね。基本的には今もあまり変わることなくそうだと思われる中堅のロータリアンもいらっしゃるかも知れません。現状はクラブの活動が不活発になっているということを物語るロータリークラブ像でもあります。

他方、Facebook を代表とする SNS を通じて、クラブの人たちばかりではなく、世界中のロータリアンと個人的なお付き合いをして非常に楽しんでおられる方もいらっしゃることも事実であると思います。その話は横に置いて、入会しばらくのときの会員の感覚としては、もっぱらクラブ例会が中心で、そこに義務的な奉仕活動とも思える、年に 1 回か何回か駆り出されるのだなと。それから、「寄付」を募ることに関する話が例会のなかでも叫ばれているということにお気づきになると思いますね。ことある毎に聞かされているという感触をお持ちになった方もいらっしゃるでしょう。財団だ、米山だ、と。

あるいは、この数年くらいに入会された新しい会員の多くは、「ロータリークラブは、奉仕クラブだ」と、奉仕活動がさまざまな形でできるんだという、そういう思いで入ってこられた方も確かに大勢いらっしゃると思うのですが、多くのロータリアンにとっては、やはりクラブの活動は、例会中心ということなのだと思います。

その例会ですが、ここには、ひとつの典型的な例会の

式次第をあげてみました。先程御紹介にありましたとおり、私は 1982 年 2 月 12 日に入会したのですけれども、やっぱり国歌斉唱には多少驚きました。ああ、国歌を歌うんだ。それから、「奉仕の理想」ですね。「御国に捧げん我らの生業」皆さん、思い出して頂いてどうでしょうか。非常なカルチャーショックを受けて、「自分は何か想像とはかなり違った所に入ってしまった」という第一印象を持ちました。国歌斉唱は、月の最初の例会に歌うところが多いようですけれども、さらに気が付きましたのは、クラブによっては、例会の次第に「合唱」と書いてあるんですね。合唱に驚いた。でも、皆さんの歌声とか、ボリュームとか、音程とか聞いていますと、まさに合唱ですよね。みんなが思い思いの感覚で歌を唄っているからそういう感じがするのでしょうね。しかも極めて控えめに。これも、カルチャーショック。

これ、全体の例会の次第ですが、アッ、先程の紹介に関してひとつ訂正があります。私は 1982 年ロータリーに入会した年の 4 か月後、6 月に茅ヶ崎交響楽団ができてそれに入会しました。同じ 82 年 2 月と 6 月ですね。ただ、「2020 年までオケに居た」とのお話でしたが、それは誤りで、2000 年ちょっと過ぎたあたりで私はロータリーの役職も忙しくなったということもあり、団員もチェロのパートの人が増えてきたこともあり、オケの活動を離れました。ここ 15 年くらいは演奏会に時たま行きますけれども演奏することはありません。私の部屋にはチェロがありますが、a 線が切れたまま 1 年半くらい経っている、という状況にあることをお伝えしておかなければなりません。

話を戻しますが、ロータリークラブの例会次第というものは、結構特殊なものであって、ロータリーに入会されてしばらくは非常に新鮮な感覚、或いは違和感、私のようなショックも含めてですね、そういった感覚があったのではないでしょうか。ただ過去に、私はキリスト教信者ではないのですが、妻がプロテスタントということでよく鎌倉の教会に行っておりました。似ていると言えば、教会の礼拝の次第に結構似ているなあ、と納得しましたね。讃美歌を唄ったり聖書の講解が在ったり、献金など。そうすると、おそらくこのロータリー運動というものも、何か核になる理念とか理念的な目標というものがあって、それに一歩一歩近づいていく無限運動なんだろうなという何となく漠然とした予測を持ったんですね。キリスト教の礼拝も信者にとっては強い信仰に至る無限運動に違いないように。

もうひとつ、入会間もないころに訳が分からなかったのはロータリー用語ですね。SAA という皇室護衛官というんでしょうか。SAA、Sergeant At Arms 、ガバナー、RI、地区、インターアクト、ローターアクト、RYLA、メイクアップ、IM 等々、全く意味不明で、言葉の解説を聞いてもやっぱり分からなくて、結局は、それぞれ具体的に経験をするとか、そうした集まりに参加して、どういう人たちが集い、何をやっているということが分かるまで分からなかったというものでした。だったら今は全部分かっているかというと、そういう質問にはちょっと答えにくい心境でもありますが。

もう一つあります。これって、ロータリーが 1905 年にできて、1915 年にはご承知の『ロータリー通解』という冊子が、ガイ・ガンディカー主筆によって出たわけですが、その冊子に相互扶助、仕事の便宜を会員相互が図り合うということを最大の目的にして入会してくるというのは間違いですよ、とそう書いてありまして、その後は基本的にタブー視されるような雰囲気になった結果、表舞台から消えていったんですね。しかしながら、多分、今でもロータリーに入会されるときには、「新たな顧客が増えるチャンス」なのかもしれないという期待を全く持たないで入ってくる方のほうが少ないのではないでしょうか。ただ、おおっぴらには、いわば禁じられているという感覚ですから、なかなか活発に相互扶助を行うという状況にはなっていないでしょう。

皆さんに質問ですが、1982 年の私が入会したよりも前にご入会の方いらっしゃいますか？

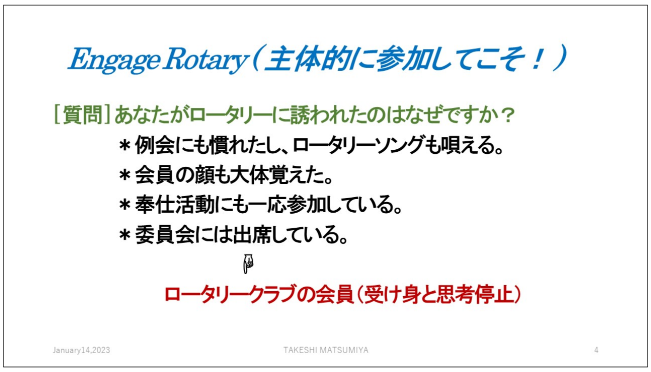
小船井さん**（国際ロータリー第 2500 地区パストガバナー小船井修一（釧路 RC）様）**
は、何年のご入会ですか？
（小船井様会場から回答）「私の入会は 1983 年でした。」

1981 年以前にご入会の方はいらっしゃらないですか？
（該当者は居ない）

私はそのとき 35 才（昭和 22 年生まれ）でしたが、クラブに 50 人くらい会員がいらっしゃいまして、もう 1 名、刀剣研磨という、日本刀の研磨ですね、そういう職業の方が同じ昭和 22 年 35 才でおられたのを覚えています。近年は、若い人が入らないという感覚があるかもしれませんが、かつてのロータリアン、古いガバナーを経験された方達の入会時の年齢を尋ねると、結構 20 代の方もいらっしゃって、30 代なんかは珍しくはなかった。ガバナーを経験されたのが 40 代後半、50 代初めという方も沢山いらっしゃったんですね。むしろ高齢化しているのは、近年の事なのだと自覚しなければなりません。考えだけではなく、現実的に基本的な若返りは必要なのではないでしょうか。

ただ、入会を強く求めるあまり、人を惹きつけるためのいろんな手法を展開するということには私は反対です。会員選考委員会というものがかつては存在しました。入会資格を広く問いかける重要なものでした。ロータリーはロータリーだと。そこのところを明確に示したうえで、クラブ会員の推薦があって入るのがあくまでも基本でなければなりません。現在は、逆にお願いして入会してもらっていることも大いにあるようですが、かつては、例えばクラブ会員 50 名のうちどなたか一人反対したら、会員が勧めた人が入会できなかったんですね。そのことを御記憶にある方もいらっしゃると思いますが、私も推薦者から聞き知っていたことでした。だから、入会できたことがひとつの誉れであったということがあります。

相互扶助（会員相互が職業的便宜を図り合う事）に関していまの私の思いは、会員同士としての信頼を前提にしてそうした仕事上の交流が行われることは、寧ろ自然ではないか、というものです。皆さんはどのようにお考えでしょう。



Slide 4

で、次ですね。最初の質問ですが、「あなたがロータリーに誘われたのはなぜですか？」皆さんが日頃受ける質問は、入会理由を聞かれるというのがあると思うんですね。どういう理由で入ったのか。そうではなくて、「あなたがロータリーに誘われたのはなぜですか？」ということについて、お聞きしたいのですが、寺嶋さん、いかがですか。

国際ロータリー第 2790 地区
パストガバナー寺嶋哲生（柏 RC）

「私の誘われた理由は単純明快でございまして、ロータリアンだった父が死んだからでございます。以上でございます。」

はい。分かりました。もう少し違う理由の方、橋岡さんいかがでしょうか。

国際ロータリー第 2790 地区
パストガバナー橋岡久太郎（佐倉中央 RC）

「はい。私は、人柄を見込まれてと言いたいところですが、寺嶋パストガバナーと一緒で父親がロータリアンで。」

では、誇るべき理由で入会したらしいという人いらっしゃらないですか。水野さん、いかがですか。

柏西 RC 水野晋治

「私も父が、と言いたいところですが、私は違いましてですね、私のクラブからガバナーを出すということで

イマジン ロータリー

兵隊が要ると先輩から言われまして、とにかく 2～3 年でよいから兵隊として頑張ってもらいたいと言われて入りました。」

適当な人がいないということだったのですか？

柏西 RC 水野晋治

「いや、若手が少なかったので。私が入る前は入会者が少なかったため、とにかく兵隊が要るんだと。」

かなり特殊な理由だと思いますが、同じような理由で入会された方はいらっしゃいますか。多分いらっしゃらないでしょうね。要するに、何と説明すればいいでしょうか、入会される前の地域社会で職業人として活躍されている貴方の姿がよい評価を受けていたから入会されたわけだと思うのです。また、それ以外の理由はないと思うのです。ところが入会後、先程いいましたような特殊な例会に毎週参加して、訳がわからないロータリー用語を聞かされて、で、寄付を募られてみたいなね。そうして月日を経るうちに、やっぱり入るところではなかったということで、よく言われますように 3 年未満で退会する方が多いということになるんでしょうね。これは、本当にもったいないことです。つまり、例会にも、出席要請が厳しかったものですから、とにかく工面して行かなくてはならないということで、出席する。例会にも慣れるし、ロータリーソングも唄える。会員の顔もだいたい覚えた。もちろん入会されたクラブが東京ロータリークラブだったとしますと、1～2 年で全員の顔を覚えるというのはまず無理だろうと思います。300～340 名いらっしゃいますよね。で、通常例会への出席者が 200 名にはならないぐらいだろうとは思いますが、その意味でも全員を知ることは大変でしょう。

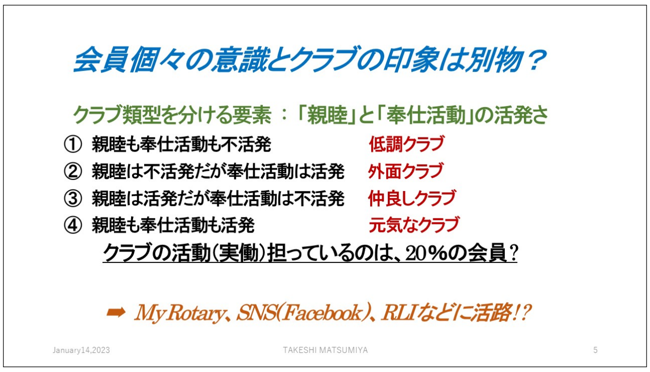
また、奉仕活動にも一応参加している。委員会にも欠席することはないと。他に、書いてはいませんけれども、人頭分担金は納めている。それと、『ロータリーの友』も一応貰っているということでね、本当は購読しているべきですから。そうした会員、2～3 年の慣れた状況のなかで多くはロータリーライフを送っている。ガイ・ガンディカーの『ロータリー通解』には、今述べましたような人たちを**ロータリークラブの会員**と称する。つまり、未だ**ロータリアン**ではないというそういう名称を与えられているのがこういう状況の人達の事なのです。極めて受動的に。つまんないんだけど仲間の手前ロータリーを辞める訳にもいかない。辞めようとの思いを抱いていてもクラブが実施するゴルフ会なんかで一緒に楽しい思いをすることがあるんですね。結局退会を先延ばしする。だけど一番大事なことは、やはり、貴方の日常の姿を評価した会員の推薦によって、入会を勧められ、全員の賛同によって会員になったということなのです。皆さんのロータリーに招かれた理由は、基本的にそういうことだろうと私は思うんですね。つまり、貴方が、入会前に評価されたその能力を十分にロータリークラブのなかで発揮するために貴方がいるんだから、受動的な態度ではなくて、貴方らしさを出さないとロータリーは何も応えてくれませんよ、というところだと思います。そのことを、ロン・バートン会長は「Engage」とおっしゃったのだと私は思っています。積極的に、主体的に、自発的に参加する人たちの集まりによって活動を支えているということですね。Engage Rotary この言葉こそは、今日の講演を通して皆さんにお伝えしたい最重要なものだと断言致します。言い換えればロータリーを良しとするのも悪しとするのもあなたの姿勢次第と言う事です。

【コラム 1】 service の語源：

service の語源は、ラテン語の servitus＝奴隷の状態です。

serve の語源は、同じくラテン語の servio＝仕える、奉仕するです。

奴隷を意味する英語 slave の語源は、同じくラテン語の sclavus です。そしてこの sclavus は、スラブ人をそのまま表しています。ローマ帝国時代の奴隷の多くがスラブ人であったという事実に基づいています。



Slide 5

ここで、クラブに話を移しましょう。クラブ類型を分ける要素には、いろいろあるのだろうと思います。昨年の神戸でのロータリー研究会で発表された甲府ロータリークラブの会員でパストガバナーの高野孫左衛門さんは、帰属意識という視点、それと奉仕活動、この要素がそれで良いかどうか迷っておられたんですが、その 2 つで 4 つの類型に分けてクラブの特色を表して語っておられました。それを参考に私は、皆さんに一番耳に馴染んでいるだろうということで、親睦と奉仕活動の活発さを軸に表現することといたしました。

① 親睦も奉仕活動も不活発　そんなクラブを思い浮かべてください。ほとんどが、これだとはもちろん私は思っていません。

② 親睦は不活発だが奉仕活動は活発　活発というところは議論が必要かも知れませんが、これ、外面クラブ、そとづら、と読んでください。

それから、

③ 親睦は活発だが奉仕活動は不活発　いわゆる仲良しクラブ

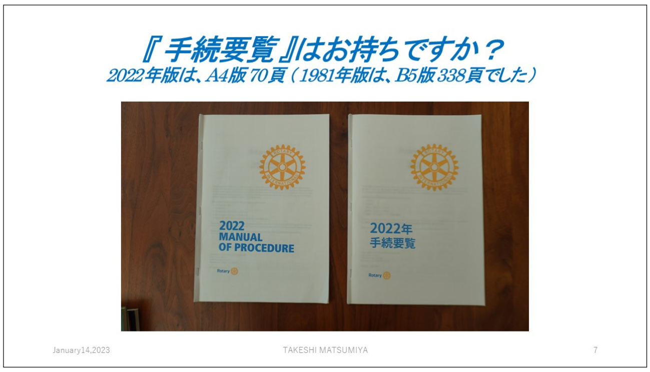
④ 親睦も奉仕活動も活発　小倉ガバナーが地区内の全てのクラブにこうなって欲しいと望んでおられる元気なクラブ。

ただ、親睦と奉仕活動という要素だけで測られるものではないと承知のうえであえてこうしていますし、また、端的にその 4 種類に分けられるものではなくて、すべてのクラブには、いろんな要素を含みながらしかも様々に中間的な様相を呈していて、決して二つとして同じようなクラブは無いことは言うまでもありません。注目すべきは、どんなクラブにおきましても、一般的に言われていることとして、そのクラブで実働を担っている人は結局二割ぐらいなのだ、ということが言われています。そうしたことから見れば、たとえ４番目の元気なクラブにおいても、実働している人たち、担い手となっている人というのはやっぱり二割前後なのだということになります。で、なおかつ、その実働を担う 20 パーセントの中に入っていないけれども、ロータリーが大好きな人もいるだろうし、とにかく一元的な評価は絶対にしないで頂きたいと思います。低調なクラブにも、地区オタクのような人がいるかもしれないですよね。クラブの活動では浮いているんだけれども、地区へ行くと目立つ人がいるとかね。地区のほうが楽しいという、そういうことを基本的に思っている人は意外に多くいらっしゃるものです。つまり、何かがロータリークラブにおいて欠けているとすると、やっぱりクラブにおけるあなたの存在が、やや受動的で、前年度踏襲で運営されることに従って活動をしているということが積み重なってきますと、先ほど少し話しましたが、低調なクラブの中でクラブがつまらないのだけれど SNS で通じ合ったロータリアンとの交流がなんと楽しいことかと感じているような方もこのパンデミックを機会に増えたと思うんですね。そんなわけで、皆様方のクラブにも Facebook などに参加しておられる方は多いと思うのですが、そこで頻繁に見かける顔がクラブにおいて実働を担っている 20 パーセントであるかどうかは、これは全く関係ないですよね。Facebook でのやり取りが楽しいとクラブの活動に参加しないんじゃないかなと逆に思ったりもします。それともう一つ、RLI ですね。ロータリー・リーダーシップ・インスティチュートと言いますが、勉強会、これはですね、クラブにおける委員会や協議会などが不活発な集まりになっていて、決まった会員による発言や所謂大きな声の人がいつも発言して終わってしまうというものも多いと思うのです。そうではなく、参加している皆さんが平等に機会を与えられて、それぞれの考えを率直に語り合い、正解を答えさせるという性格のものではない問いかけ（RLI の特質）に対して自発的に答えて、参加者に拠る活発な議論の積み重ねのなかからロータリーの良さに会員が目覚め、そうした参加型の会議が頻繁に持たれることに拠って、ク

ラブが活性化することこそ RLI 本来の目標であるのに、私が見ましたところ、圧倒的に RLI は地区の行事になってしまっている。で、地区の RLI に参加した仲間同士は仲が良く、また今度行ったらあいつに会える。その結果、一向にクラブの活性化に供する活動になっていないということが私は非常に悩ましいなと。折角皆さんご承知のように、ロータリー活動というものはクラブが中心だということは、多分例外なく、どんなシニアリーダーもおっしゃるに違いないと思うのです。クラブが主体だという意味合いをしっかり理解して臨めば、現実に地区の行事にしてしまっているような事態を傍観しているというのが非常な間違いであることに気付くはずだと思います。私の地区（2780 地区）はやっていないですね RLI は。ただし、私は、2007 年に国際ロータリーの研修リーダーの役割を頂きました。その研修リーダー対象のガバナーエレクト研修に先立つ一週間のセミナーの場で、非常に活発な議論を交わし合う場には違いなかったのですが、どんなに平易なテーマであっても、深掘りしていくことの楽しさや皆が常に自発的かつ積極的に想いを語りあう喜びを体験しました。ファシリテーターの問いかけに一人一人が反応するもの、２人お隣同士で相談して発言するもの、3 人集まってやるもの、5〜6 人でということで結論を出してやるものなど。それから、例えばボランティアを頼まれ前に出て皆さんが発言をする重要な点だけを大型のボードに書き出すとかね。そういうようなことをやっていくうえで楽しさというものに目覚めましたので、私はその研修を終えてから地区の研修リーダーを受けた際には、全て一応 RLI 形式にして会議を運営することを心掛けました。回答者とのアイコンタクトを常に心がけること、オンタイムで始めオンタイムで終わること、参加者に背中を向けない事、テーマに沿わない発言を許さない事、異なる話材は時間に余裕が出来た時に扱う事など本当に興味深い体験でした。基本は要するにクラブの活性化、会員個々が自分らしさを活かすという場面を作ってあげて、その中でロータリーに目覚めて活動につなげていきたいというのが RLI ですから、やっぱりそのように使って欲しいなと常に思います。私も、RLI の日本支部の顧問という名前を頂いているのですが、好んで参加することはありません。たまに行ってご挨拶をするときは、いつもそのことを申し上げているんですね。地区の活動に終始しては駄目ですよと。クラブの一人一人のロータリアンが活性化するための集会の方式なんですから。要は、ENGAGE　ROTARY 自分らしさを、自分がなぜロータリーに招かれたのかということをもう一度思い返して頂いて、その表現あってこそ私らしさ、貴方らしさを発揮することとなり、その振る舞いがクラブにとって必要なんだという、そう意味で皆さん入会している。その自覚だけは是非持って頂いて、もし、そういう働きかけが少ないようであれば、発言して積極的に前へ出て、自分らしさを生かすリーダーの模範になって頂きたいと思います。

Slide 6

これは、1982 年入会の時に受取った。この頃この 3 冊は全員に、入会者全員に渡されていたものです。『平和への七つの道』、『奉仕こそわがつとめ』、『奉仕の冒険』という 3 冊です。『奉仕こそわがつとめ』をご存知の方手を挙げて頂けますか。パーシー・ホジンソン Percy Hodgson ですね。1949 年 RI 会長、来日の際の羽織袴で写っている写真があるんですけれども、ご承知でしょうか？その後の注文もあって数年は新会員への配布があったものと記憶しております。『平和への七つの道』は財団に関する内容を多く掲載した本ですね。もう一冊『奉仕の冒険』は、ロータリー一般に関する知識が詰まった本です。もし、御所望でしたら、是非お申し出ください。いつでもお貸しいたします。すっかり過去形の話になりました。書物を読むこととインターネットを通じて学ぶことも今思うと随分違いがありますね。



Slide 7

今年度、つまり2022年度の『手続要覧』の表紙の写真がこれです。ご承知の通り、今回の『手続要覧』はデータとして挙げられてはいますが、印刷冊子としては発刊されません。各自ダウンロードしたうえで印刷して頂くものとなりました。ここまではその都度印刷物としてRIから発刊されておりました。そこで質問ですが、ご入会時に『手続要覧』を受け取った方手を挙げてもらえますか。はい。『手続要覧』を入会の時に貰いました。えー！　こんなですか？殆ど居らっしゃらないと言う事ですね。私たちは、全員貰ったんです。いわば自動的に全員。ですから、これが実情なのですね、今の。それではお尋ねいたしますが、『手続要覧』、この中にはどんな事柄が記載されているのでしょう。最新のもの、或いは16年以降の『手続要覧』には、今井さん、どのようなことが掲載されているんですか？

国際ロータリー第2580地区今井忠（東京御苑RC）様

「ロータリーの目的、今綱領5条ですか。昔は6条でしたか。それから、定款。国際ロータリーの定款もあるのですが、標準クラブ定款をしっかり頭に入れなさい、ということを言われました。」

ありがとうございます。それでは漆原さん、『手続要覧』には何が、掲載されていますか？この中に。

国際ロータリー第2790地区

パストガバナー漆原摂子（勝浦RC）

「国際ロータリークラブ標準定款。細則、それから標準ロータリークラブ定款・・・」

「あっ間違えました。国際ロータリー定款、細則、標準ロータリークラブ定款、クラブ細則、でそれ以外にも掲載されているものがあります。」

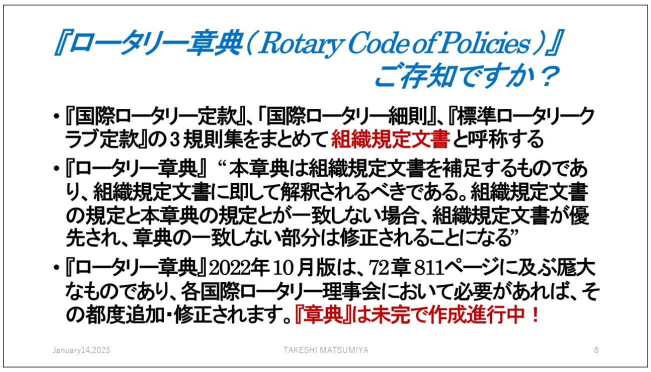
国際ロータリー第2500地区

パストガバナー小船井　修一（釧路RC）様

「社会奉仕に関する23-34の声明が掲載されています。」

ロータリーの基本理念という章があって、中核となる価値観とか、4つのテストとかが載っている部分とロータリーの戦略計画にも小さな章が充てられています。そこには、ビジョン声明を頭に、皆さんよくご存知の「より大きなインパクトをもたらす」、「適応力を高める」などが掲載されています。話のついでと言ってはなんですが、歴史的なドキュメントだと言われている先程話があった決議23-34。決議23-34というのは、国際ロータリーがその活動の中で運用するという意味ではほとんど無視されているのが実情であり、実際の記載は「社会奉仕に関する1923年の声明」となっていますから、これしか見ることの無い方にとって「決議23-34」と言っても既に通じないこととなっているのです。この事実は重いと思います。その後に「社会奉仕の声明」のタイトルで1992年の決議286が掲載されていますが、これは、基本的に実働に供しているというふうに考えて頂いて良いものとなっていることをお伝えしておきます。基本理念の掲載順序の変更も国際ロータリー理事会の意図を表現していることをご承知おきください。

このように、かつては『手続要覧』一冊あれば日頃のロータリー活動全般にさほど苦労することは無かったのですが、現在は、そうした要求をほぼ満たさないものとなりました。



Slide 8

ロータリー章典というものをご存知でない方、ご存知ない方ですよ。はい。分かりました。では、それ以外の方は全員ご存知ということですね。そこから質問を始めると意地悪みたいですからしません。先程もありました『手続要覧』に必ず載っているのが、「国際ロータリー定款」、「国際ロータリー細則」、「標準ロータリークラブ定款」。「クラブ細則」も掲載されていますが、これは組織規定文書の 3 つに入らない。つまり、3 つの組織規定文書に違背するような項目がなければ、各クラブにおいて各クラブのあり様に従って作成してよいというものなのです。でも、参考として RI は提供をしていると。現状は、大多数のクラブは、その参考細則を使っているところが多いだろうと思います。

『ロータリー章典』の価値がどういうものであるかを規定した文章を、このセミナーが始まる前にお約束した小船井さんに読んで頂こうと思います。

国際ロータリー第 2500 地区

パストガバナー小船井　修一（釧路 RC）様

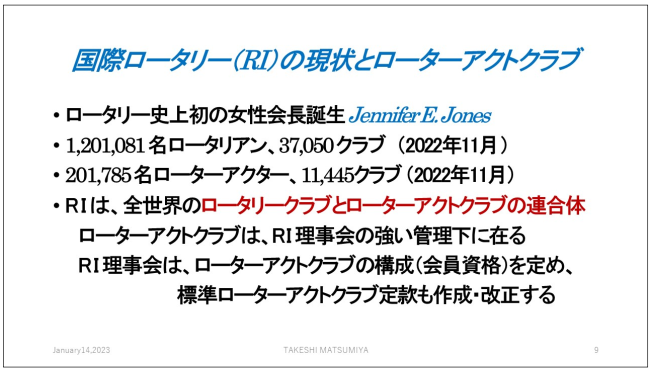
『ロータリー章典』 “ 本章典は組織規定文書を補足するものであり、組織規定文書に即して解釈されるべきである。組織規定文書の規定と本章典の規定とが一致しない場合、組織規定文書が優先され、章典の一致しない部分は修正されることになる” 特にこれは、RI 理事会に向けて、章典を変更する部分がある時点で、その都度追加・修正されます。

これが謳われている文言なんですが、実際そのまま運用されていると考えているとすれば、それは事実に反しているということが明らかなのです。72 章 811 ページは、続いてなくて、章でも空欄なところがいっぱいあるんですよ。ですから未完成で、国際ロータリーはどう言っているかというと、これから、いわゆるロータリーのリーダーに十分ロータリーを理解してもらうために完成させていくと。数年かけて、1 年ごとに、何章かずつ更新していって結果として完成をさせたいと書いてある未完のものなのです。一番大事なことはですね、後で触れますけれども、つまり各理事会で更新するんですよ。毎回、毎回の理事会で必要があれば修正したり、それから追加したり、そういうことを毎回の理事会で必要があればやっている訳です。ですから、理事会の開催回数を考慮すれば 2 年間で 7 回くらい変更されているわけです。しかし、その都度日本語の訳というものが出されるものでは無くて、今出ているものの前は 2009 年でそれ以降無かったのかな。その後 2650 地区ロータリアンのご努力で日本語訳の『章典』が出版されたのですが、それにいちゃもんがつきまして、さらには国際ロータリーから、回収要請が出されるという顛末でした。

これもまた後でお話します。つまり、逆なんです。先程、小船井さんに読んで頂いたのは、違いがあったら組織規程を標準にして『章典』の文言を変えるということになっているんですが、そうではないんですよ。『章典』に掲載されると、『章典』に合わない組織規程文書の文言に対して規定審議会に提案をして、『ロータリー章典』のように変えようということが RI が現実にやっていることなんです。これは是非覚えて頂きたい。逆転しているんですね。

【コラム 2】　DEI ではなく DET は？：

私は DET を提唱します。D は diversity、E は equality、そして T は tolerance です。クラブの構成要件を満たしてロータリークラブに入会した会員は、対等かつ平等で、その持つ多様性は、クラブと会員によって受け入れられ、生かされなければなりません。会員相互の自由な議論の機会が保障され、それでも合意や共感に至らない時、互いの人格を認め合う寛容の努力が必要です。



Slide 9

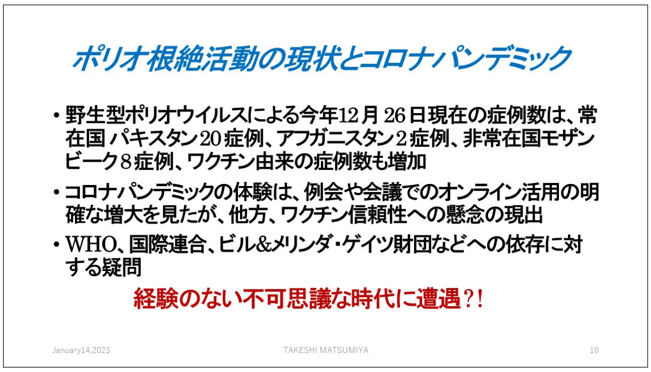
国際ロータリーの現状とローターアクトクラブということをお話します。『ロータリー章典』という組織規程文書の背後にありながら、膨大な規定を網羅していて、近未来こうしていきたいという RI の願望はそこに盛り込まれて、やがて規定審議会に制定案として出され、組織規程のほうが修正されていくというのは、私がみている限り事実ですね。

ロータリーの現状ですね。ロータリー史上初の女性会長誕生。Jennifer E. Jones、皆さんご承知でしょうけれども、この誕生はですね、しばしば「ロータリー117 年の歴史上初めて」と書いてありますが、それに賛同できない方いらっしゃいますか。いかがでしょう。

これですね、シンガポールの規定審議会が行われて規約が改正になって初めて女性が入会できるようになったのです。1989 年ですよね。だから、1905 年から 1988 年までは入会できないわけですから。それも足し算をして 117 年で初めてみたいな言い方は、私は、ちょっと納得しない。30 数年が経過したそのなかで初めて誕生したということが実際なんですよね。

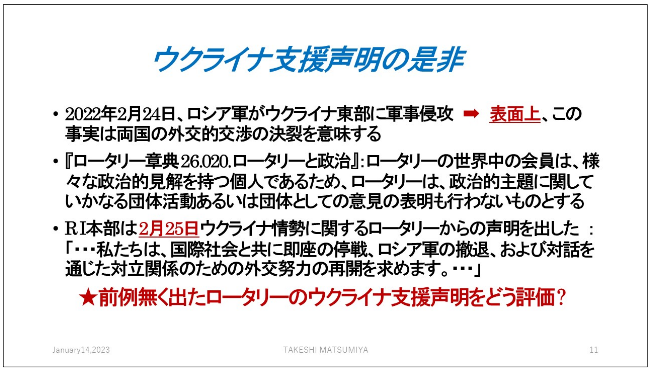
『友』の 1 月号を見ますと、11 月現在の会員数は 120 万人に達しているんです。復活したんですね 120 万人に。で、ローターアクターですが、ローターアクターはどちらかというと減っているのはご承知でしょうか。減っているんですね。皆さんご承知のように、2019 年の規定審議会でルール違反かと思えるような、一度否決されたのに翌日、根回しをしたうえで再提案をして可決されてこういうことになったんですね。「RI は全世界のロータリークラブおよびローターアクトクラブの連合体である。」これで、その後言われていることは、地区の委員にも委員長にもローターアクターを、そういう話がどんどん出てきてますよね。だけどここで言っているのは、クラブなんですが、ローターアクトクラブとロータリークラブが国際ロータリーの会員という資格を同等に持っている。でも、内実は、本当は全く違ったままなんですね。だから、ローターアクトクラブの会員であるローターアクターを色んな場面で起用していこうと。で、なおかつ、やがてはロータリークラブの会員になって欲しいという願望も含めてです。実は、ローターアクトクラブは RI 理事会の強い管理下にあります。ですから、一般的な私たちの認識としては「国際ロータリーのプログラム」ではなくなったんですけれど、会員資格を定めるのは RI の理事会。それから、標準ローターアクトクラブ定款は規定審議会に諮ることなく理事会で決めていくんですね。変更も追加も。そういう強い縛りの中にありながら、我々の認識としてはローターアクターもロータリアンも一緒になったみたいなある種の混乱が今生じていると思うんですね。そこのところをよく、つまり会費は全く違いますよね、ご承知のとおり。標準ロータリークラブ定款は規定審議会でしか変えられないにもかかわらず、標準ローターアクトクラブ定款は理事会がいつでも変更できる。そういうことを、そういう縛りの中でローターアクトを登用していこうという雰囲気だけが前面に出てしまって、結果としていま一番苦労しているのがローターアクターではないだろうかと思います。つまり、経済的な自立も出来ていないような、スポンサークラブがね、かなりな資金的な援助をしているということが現実としてありながら、全世界のロータリークラブとローターアクトクラブの連合体が RI の会員に、それぞれ会員資格をもったものなんだということを言っているということを是非ご承知頂いて、その縛りは、少なくとも RI のプログラムであった時と変わりはないのではないかと。国際ロータリーのプログラムとして、インターアクト、青少年交換、RYLA、ローターアクトがあった時と、規則的な縛りというものが変わらないにもかかわらず。そうすると結局は、会員増強の成果として、ロータリアンとローターアクターを足すと 140 万だと言いたいのだろうかと思ってしまう。そこから、どのように国際ロータリーが望むように

変更していきたいのかが明確に示されるまで、しばらくは混乱が起きると私は思いますが注目していかなければなりません。



Slide 10

ポリオ根絶活動の現状とコロナパンデミックですね。12 月 26 日現在の症例数ですが、パキスタン 20 症例、アフガニスタン 2 症例、非常在国モザンビークが去年 7 症例で、今 8 症例になっています。なおかつ、公表されておりませんが、野生株由来でなく、ワクチン由来のものも当然あるわけです。このコロナパンデミックで、ワクチン由来というものについての何となく胡散臭い感覚は非常に増えただろうと。皆さんの中に、本当に有効なのかという、テストをしていないのかしているのか。アフガニスタンやパキスタンのような国の内部の混乱しているところで本当に正確な数が分かっているのだろうかということも、改めて私たちはこのコロナパンデミックを経験したがゆえに疑問を呈するということもあるだろうと思います。つまり、ワクチンの信頼性に疑問を抱かせるような状況を私たちは現実に味わっていると思うんですね。WHO、国際連合、ビル&メリンダ・ゲイツ財団などへの依存に対する疑問も呈せられるようになって来た、そういうややこしい、というより端的にカオスというしかないような時代を迎えているということはご承知のとおりです。2020 年のアメリカ大統領選挙結果の不明瞭さ、世界中に広がる分断、ヨーロッパにおける外交的混乱、中東情勢の不安などなど、正義の基準も曖昧になり、訳の分からない世情が今私たちを支配しています。



Slide 11

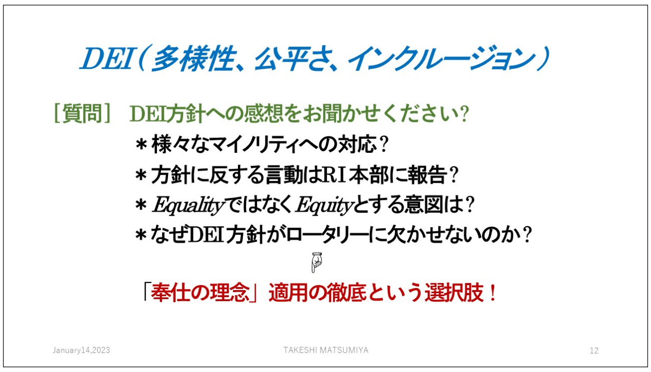
もうひとつがウクライナ支援声明。これのどこがロータリーがやってはいけないことをやったのかという話。ここは慎重かつ限定的にお話しなければなりません。つまりそこに書きましたように、昨年の 2 月 24 日ロシア軍がウクライナ東部に軍事侵攻した。ということは、ロシアとウクライナの外交的交渉が行き詰まってこうした侵攻という事態になったんだろうということを、基本的には戦っているわけですから意味すると思うんですよね。また、できればそう思いたいし。これに関してはですね、先程の『ロータリー章典』に、さらには、具体的に標準ロータリークラブ定款にも政治に対する姿勢というものが書かれているので、クラブ定款の該当箇所は、皆さんお帰りになったらお読みいただきたいと思うんですが、『章典』26.020. ロータリーと政治。「ロータリーの世界中の会員は様々な政治的見解を持つ個人であるため、ロータリーは政治的主題に関していかなる団体活動あるいは団体としての意見の表明も行わないものとする。」

例えばベトナム戦争とか、シリア内戦とかイラン・イラク戦争とか様々な内紛や戦争がいっぱいあったんですが、一切ここまで今回のウクライナ危機を除いては、ロータリーは声明を出していない。何故このウクライナの危機にだけそういうものを出したのかということはやっぱり問わなければいけないと思うんですね。

RI 本部は、ロシアの侵攻した 2 月 24 日の前にも２月 15 日頃ですか懸念を示すような声明を出して、２月２５日にはウクライナ情勢に関するロータリーからの声明を出した。その声明の途中部分ですが、「・・・私たちは国際社会と共に即座の停戦、ロシア軍の撤退、および対話を通じた対立関係のための外交努力の再開を求めます。」という声明を出しているんですね。だから初めて禁を破

ったということ、その意味を説明して欲しいということです。

前例無く出たロータリーのウクライナ支援声明をどう評価するか。皆さんはどのようにお考えでしょう？



Slide 12

DEI については是非ご感想を多くの方から伺いたいのですが。DEI 声明を出していることに関して、どんな風に、これから地区で推進していかないといけない立場においてどんな風に捉えておられるか、如何でしょう寒郡さん。

国際ロータリー第 2790 地区

ガバナーノミニー寒郡茂樹（富里 RC）

「ガバナーノミニーの寒郡です。DEI については、実は先般いくつかのクラブで卓話をさせて頂きました。私として感じているのは、inclusive な組織にしてですね、帰属意識をもって頂いてというような話をして、初めて会員も入って来て頂けるだろうと私は思っているので、私個人としては是非推進していきたいと思います。」

はい、ありがとうございます。他の御意見のおありの方いらっしゃいますか。あまりここはしつこく聞かない方がよいだろうと思います。これって、基本的には、入会者の資格を問うような場面で一番語られてきたんですね。それはつまり、様々なマイノリティへの対応。これがあるんですよ。DEI の方針に明らかに。つまり、入会者がそういうマイノリティと言える人が入会を求めた時に、それに対してクラブが否定的な判断をしたり、入会を認めなかったりすることがあった場合は国際ロータリーの本部へ報告することになっているんですね。で、DEI の E は Equality ではなくて Equity だと強調もしています。Equity は皆さんいろんな解説の機会でお知りになったかと思うんですが、「結果平等」というのでしょうか。つまり、マイノリティの人にとって最大限の利益になるよう振る舞いなさいということに言い換えればいいのかもしれませんが、そのことがロータリー的な判断であるかどうかということは議論が為されるべきではないかと思います。入会者を増やすという意味でマイノリティの人たちを視野に入れていくということであったとしても、入会資格、会員資格というものについての議論を何もしないで、これを出したのだから当然資格があると思って対応しろというのはちょっと一方的過ぎるし、短絡過ぎるし、もう少しロータリーが常に抱えている課題のなかで議論を尽くす努力を惜しまないでいただきたいものだと思うんですよ。

国際ロータリーが一切語らなくなった「奉仕の理念」The Ideal of Service サービスの理念というものについて、国際ロータリーはもう 20 年来そういう特集もなければ何もなくて、自動的に「4 つのテスト」と「ロータリーの目的」と「行動規範」を機関誌に載せているだけです今は。それでいいんでしょうか。「奉仕の理念」というものを適用していくというのが「ロータリーの目的」の核心として書かれているわけですから、そのように、いろんな場面に適用していくということで、相当 DEI の主張をカバーできるだろうと私は思ってはいます。強いて言えば「奉仕の理念」の適用をしっかり実施しているなら DEI という手法そのものが不要ではないかと言う事です。

世界に希望を生み出そう

Slide 13

このスライドが出ましたから、コーヒーの準備だけして頂いて。これは皆さんご承知のローゼン・シングル・クリープというフロリダ州オーランドの国際協議会の会場になったホテルですね。

皆さんは、次年度の RI テーマはご存知ですか。テーマが決まりましたね。

国際ロータリー第 2790 地区

小倉純夫ガバナー（松戸 RC）

イマジン・ロータリー、いや、そうでは無くて「Create Hope in The World」ですね。

それね、希望を生み出そうという日本語訳になったんですね。当日は「創り出す」との訳語が出ていたように思います。「ロータリーに希望を生み出そう」今年 7 月からの会長は、R .Gordon R . Mcinally、RIBI、スコットランドの方ですね。もう一つジョン・ヒューコ事務総長がアドレスをした動画もがあるのですが御覧になった方いらっしゃいますか。

国際ロータリー第 2500 地区

パストガバナー小船井修一（釧路 RC）様

マイロータリーからダウンロードできますので、見てください。ジョン・ヒューコ事務総長は 2019 年の規定審議会で COO（最高執行責任者）から CEO（最高経営責任者）になりました。今までの事務総長は国際協議会では「事務局スタッフの長」としてガバナーやロータリークラブを、支えていく話をするのが普通だったのですが、今年の国際協議会のビデオではジョン・ヒューコ事務総長は最高経営責任者の立場で国際ロータリー会長が話すような内容を発言しています。また、ロータリーが対外的な活動を促進すれば会員が増えていくはずであり、その部分に地区、クラブで奉仕活動をしてくださいと言う話をしています。

はい。そうですね。是非動画を御覧になって、夫々のロータリアンに評価いただくと良いと思います。その中で私が一番気になったのは、今般のウクライナ危機に関して、ロシアを一方的に非難しているということだと思います。余りにも、強い言葉で。

前半、ここまでについて、なんでもよいのですが、質問、意見、異論。挙手を頂いて、挙手がなければ司会者からご指名をして頂いて、なんなりと、入会したての方の質問も歓迎します。ただ余りにも、この場に相応しくない専門的な話はちょっと控えて頂いたほうが良いですが、いかがですか。ここまでの話の中でご質問。

国際ロータリー第 2790 地区

ガバナーノミニー寒郡茂樹（富里 RC）

「先程 DEI ですね、松宮さんからですね、ご指摘されたことについて、私もやはり一番どういう風にしようかと思っているところです。特に多様性を図ると、どういう基準でですね、クラブの会員に、仲間になって頂こうかということについてはですね、どのように考えるのかということを結構考えたんですね。私の中では、新たな人材を見つける基礎と思うんですが、ロータリーの目的、奉仕の理念で、奉仕の理念を推奨、育むとか、あるいは中核的価値観を共有できる、出来る可能性があるだとか、そういう人が大事なのではないのですかと私は話をしてしまったのですが、その点についてはどのようにお考えでしょうか。」

非常によくお考えで、お伝えなさった事に間違いはないだろうと思いますね。そういう感覚で。つまり一番最初のスライドでも言いましたように、かつては会員が推薦して、クラブに回して、1 名反対者がいたら入会できないという状況でしたけれども、今の現実はどうか入っ

てください。そういう様な立場に基本的に変わっていますし、それが日常になっていますから、そこのところを圧倒的に崩して元に戻すみたいなことは、僕はできないと思うんです。だからやはり、その人の、その人しかもっていない良さというものが、我々のロータリークラブにとってひとつの光になると。そういう必要であるとの根拠をマイノリティの方であれ、是非という気持ちを示してね。そうした姿勢はやっぱり好ましいし、決して会員数を増やしたいからみたいなことではないと。マイノリティと一般的に言われているけれども、我々にはない価値を、敢えて申し上げれば決定的とも言えるような弱さというものを一部に抱えているということがね、ロータリアンにとってどれだけ励みになるかは計り知れないと思うのです。私、日頃のロータリーですごく嫌なことは、良い話、良いことばかりをしているだけの様な当たり障りのない話だけでロータリーが語られていくんですね。だけども、参加している個人は日々悩みを抱えている弱い、苦悩する人間なんですね。本当に喉元まで、親しい会員に向かって出かかっているけれども、言えないで持ち帰ってしまう悩みや苦しい思いもあるだろう。そういう、何というか人間らしさというか、弱さというか、強い悩みを抱えているということを分かち合えるような友達がいてこそ、ロータリーらしい親睦がその具体的な関係の中で発揮されるのだと。仲間であった会員の退会に際しても「なんであの人が辞めていったのか。」ということに触れ合えることの出来た人は誰もいない。黙って辞めていったんだと。退会の本当の理由は誰にも語れずに。こういうことってロータリーとしては非常に恥ずかしい。ロータリーが敢えて親睦を標榜するのであれば、やっぱりその人の琴線に本当に触れることができる仲間がいて、で、その人が声をかけて、こんなことで困っているんで、なんとか仕事上の悩みから解放してあげるために我々が知恵を発揮しようとかね。そういう活動が当然ロータリークラブでは無ければいけないと思うんですよ。こう言って良ければ、いわばロータリアンはそれぞれ独自の悩みと弱みを背負ったマイノリティなんです。

休憩

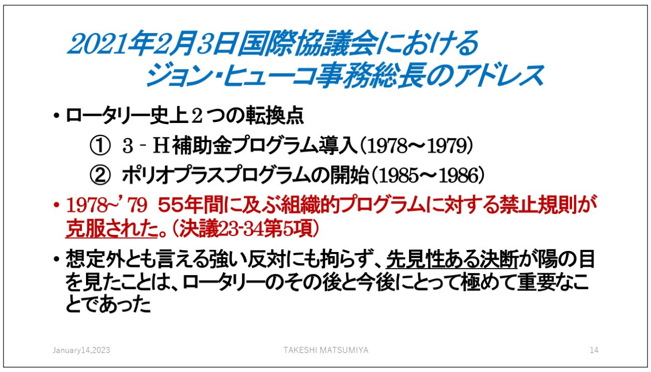
10 分間休憩　（コーヒータイム）

Slide 13(再掲載)

それでは、後半ということで。

なんとなく延びて延びてということで、皆さんのお帰りの時間が遅くなるといけませんので、後半は若干急いでと思っています。

上にありますのが、次年度のテーマですね。R .Gordon R . Mcinally（ゴードン・マッキナリー）国際ロータリーの会長エレクトばかりでなく、会長、財団委員長、事務総長そうした人たちのアドレスを是非聞いていただいて、どんな風に感じられたかということを皆さん同士で議論されるのは大変意味の在る事だろうと思います。



Slide 14

先程の国際協議会の会場となったホテルの写真が出ました時にもちょっとお話しましたけれども、これは 2 年前、2021 年 2 月 3 日、国際協議会におけるジョン・ヒューコ事務総長のアドレスです 。彼は、こう言っています。

ロータリー史上２つの転換点

① 3－H 補助金プログラム導入

これは、東京大会を頂点として決まったものなんですね。

もうひとつが、

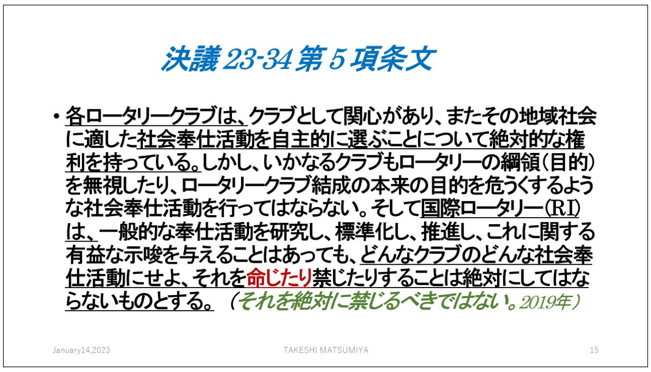
② ポリオプラスプログラムの開始

1985 年カルロス・カンセコ会長のときでした。

この二つを挙げているのです。115、6 年経ったロータリー史上での転換点の二つが非常に接近した 1978 年と 1985 年ということなのです。面白いですね。それほどにロータリーにとっては大きな出来事であったという認識をジョン・ヒューコ事務総長が持ってこのアドレスをしたと言う事です。

ここで、先ほど、「社会奉仕に関する 1923 年の声明」と現在の通り名はそうなっておりますが、日本のロータリアンは伝統的に、常に「決議 23-34」という呼び方をしてきたんですね。これ、55 年間に及ぶ、1978 年から 55 年引いた、1923 年の 34 号という決議ですね。その条文が禁じていたことを克服したとの画期的なものとして二つあると。そう述べたんですね。

「想定外とも言える強い反対にも拘らず、先見性ある決断が陽の目を見たことはロータリーのその後と今後にとって極めて重要なことであった」というのが、ジョン・ヒューコ事務総長の言葉です。



Slide 15

で、ここでちょっと見ておいておかないといけないのが、「1923 年の社会奉仕に関する声明」、いわゆる「決議 23-34」の第 5 項というものが足かせになっていてできなかったことが、できたというわけですから。その条文をちょっと見てみたいと思います。橋岡さん、これ読んでもらえますか。ゆっくりでよいですから。緑の文字は抜いて、ならないものとする。までです。お願いします。

国際ロータリー第 2790 地区

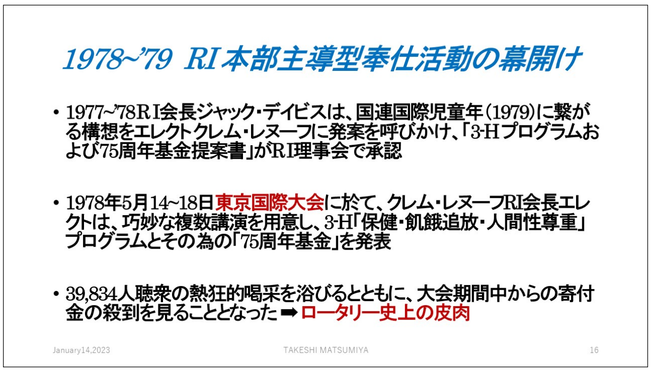
パストガバナー橋岡久太郎（佐倉中央 RC）

「各ロータリークラブは、クラブとして関心があり、またその地域社会に適した社会奉仕活動を自主的に選ぶことについて絶対的な権利を持っている。しかし、いかなるクラブもロータリーの綱領（目的）を無視したり、ロータリークラブ結成の本来の目的を危うくするような社会奉仕活動を行ってはならない。そして国際ロータリー（RI）は、一般的な奉仕活動を研究し、標準化し、推進し、これに関する有益な示唆を与えることはあっても、どんなクラブのどんな社会奉仕活動にせよ、それを命じたり禁じたりすることは絶対にしてはならないものとする。」

はい。ありがとうございました。お聞きになったとおりの文言なんですね。2016 年から先程いいましたが、『手続要覧』が圧倒的に薄くなった。今年は 70 頁だった。16 年、19 年、22 年度と 3 度『手続要覧』が出ているわけですけれども、16 年には、今読んで頂いたような文言が載っているんですが、19 年になると、緑のように変わるんです。つまり最後の、「それを命じたり禁じたりすることは絶対にしてはならないものとする。」という文言が、「 それを絶対に禁じるべきではない。」に変わったんです。つまり命じても良いといったそういう含みもあってですよ。で、これはですね、先程いいましたように、『ロータリー章典』に緑の文言が出て、それにならって、ただし、規定審議会という場での議論もなしで、そのまま変更されているんです。『手続要覧』の文言が。こういう事が現実に行われているということを知って頂くという意味でも『手続要覧』に是非目を通して頂きたいなと。組織規定の前に頁を費やして書かれているものの順序も微妙に変わっていることにお気づきになると思うんです。国際ロータリーがいま何を大事なものとしたいのか。

2016 年に、白い頁、最初に決議 23-34、すなわち「1923 年の社会奉仕に関する声明」。それがトップに出てきていたんですね。ロータリーの理念という中で。これが、2022 年の『手続要覧』では、ロータリーの理念と書いた中の、一番最後に、「ロータリーの目的」の後の頁に載っている。

国際ロータリーの標語、使命、ロータリー財団の使命、中核的価値観、DEI コミットメントそういったものが先にくるという状況になっているということです。その変化を見て頂くだけでも、国際ロータリー理事会がどんなことを変えていきたいか、どうしたいかを察知することができると思うんですね。単に掲載されているという見方ではなく、どこに、どのような順序で載っているかということにも注目願いたく思います。



Slide 16

これが、先ほどやりました、これからいうことになるのかな、つまり今の話を繰り返しますが、1978～79 年 RI 本部主導型奉仕活動の幕開け。兆しはもっともっと前から、論争があり、やっていきたい障害者、障害児童に対してのプログラムというものをロータリーは一番大事なものとして扱っていくべきだという論争もずっと長くあったりしたわけですよね。それこそ 1913,1914 年頃から。ですが具体的に大きなこととして始まったのは、ジョン・ヒューコ事務総長が言うように二つの転換点であると。その一つ目ですねこれ。

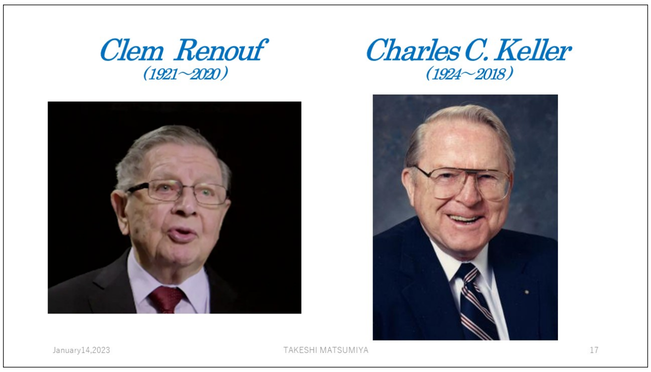
1977～’78 年 RI 会長ジャック・デイビスは、国連国際児童年（1979 年）に繋がる構想を次のエクレム・レヌーフ会長エレクトに、小児を対象とした感染症に関するようなプログラムを呼びかけてはどうかということを言って、推奨という意味で理事会もそれを推奨して、クレム・レヌーフはそのドラフトを一晩で書いたと記載してあるんですね。「3-H プログラム」と「75 周年記念基金」。それを理事会が翌日承認してしまった。

1978 年 5 月 14 日東京国際大会で、このとき圧倒的な人数が集まりました。さすがにこの点は日本ですから。その都度記録を作ってきたのが日本の国際大会。クレム・レヌーフ RI 会長エレクトは巧妙な複数講演を用意し、3-H「保健・飢餓追放・人間性尊重」プログラムとその為の「75 周年基金」を発表したのです。東京大会でですよ！

39,834 人聴衆の熱狂的喝采を浴びるとともに、大会期間中からの寄付金の殺到を見ることとなったのですから。それこそ、かたくなに職業奉仕こそロータリーの金看板だと主張し続けてきた、その当の国である日本で、財団のプログラムを、しかも、基本的なルールを犯して推進することに圧倒的に喝采をしたのが日本のロータリアンだったという、この皮肉をですね、我々も記憶しなければなりません。

【コラム 3】　リーダーシップ：

ロータリーにおけるリーダーシップとはどのようなものでしょう？「ロータリーの目的」第 3 項はこう述べています。「ロータリアン一人一人が、個人として、また事業及び社会生活において、日々、奉仕の理念を実践すること」と。だとすると、当然、リーダーシップを発揮する際にも奉仕の理念を適用することを要請していることになります。端的に言えば、それは「仕える者となりなさい」と言う事です。新約聖書『マタイによる福音書』第 20 章 26 節には次のように述べられています。「…あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、皆の僕（しもべ）になりなさい。…」同『ルカによる福音書』第２２章 26 節。



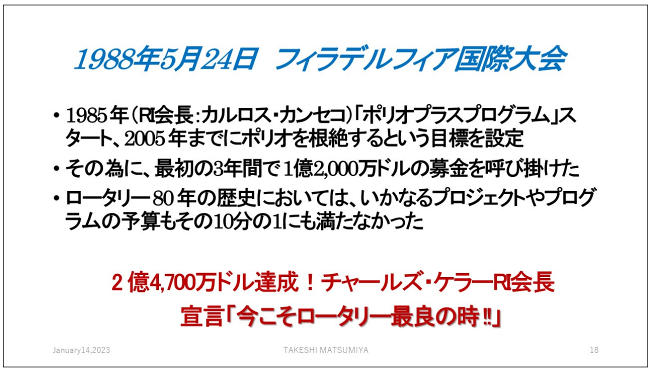
Slide 17

Clem Renouf（1921～2020 ） Charles C. Keller（1924～2018 ）

クレム・レヌーフは長生きしました。もうちょっとで 100 才という。

チャールズ・ケラー会長の国際大会はフィラデルフィアでの開催でした。

ジョン・ヒューコ事務総長の語る二つの歴史的転換を象徴するお二人の国際ロータリー会長です。人は、自らが指導的役務に就くと、組織活動の実情が能力に及んでおらず勿体ないことと思い、その持つ可能性に相応しい活動を実現できるものと誤認してしまう傾向があるのだと考えられます。そうした気持ちが規則の逸脱を招来し、事実上の勇み足を産むのかも知れません。理解できないことではありませんが、そうした落とし穴には、やはり立場故にこそ落ちてはいけないのです。

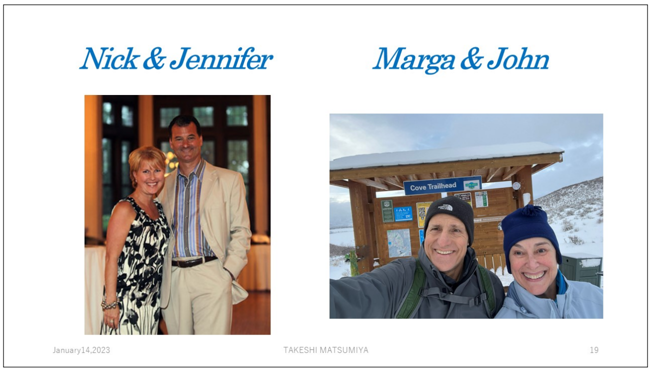


Slide 18

1985 年カンセコ会長のもとに始まったわけです「ポリオプラスプログラム」というのは。

これは結局 3H と違うものというよりは、当然のことながらポリオをやっていくということを前提に始まった 3H だったと言ったほうが良いと思いますね。

85 年にスタートして 20 年間、2005 年までにポリオを根絶するという目標を設定した。そのためにと募った当初 3 年間の金額が、その当時としては尋常ではなかったんですね。1 億 2,000 万ドルの募金を 3 年間でと呼び掛けました。その募金額は、ロータリー80 年の歴史においてはいかなるプロジェクトやプログラムの予算もその 10 分の 1 にも満たなかったという、そういう事を始めたんですね。で、結果として、1988 年、3 年後ですか、2 億 4,700 万ドルを達成したということで、『奉仕の一世紀』というロータリー創立 100 年を記念して刊行された本を御覧になると、風船がいっぱい、カラーの風船が会場に上がっている写真を見ることが出来ます。同時に、「このときこそロータリー最良の時」だとチャールズ・ケラー会長がおっしゃった象徴的な宣言も。3 年で目標の倍を超えた寄付が集まった。そういう実績をもって、「決議 23-34」の第 5 項というものは文言はあっても単なる飾り物となったのです。

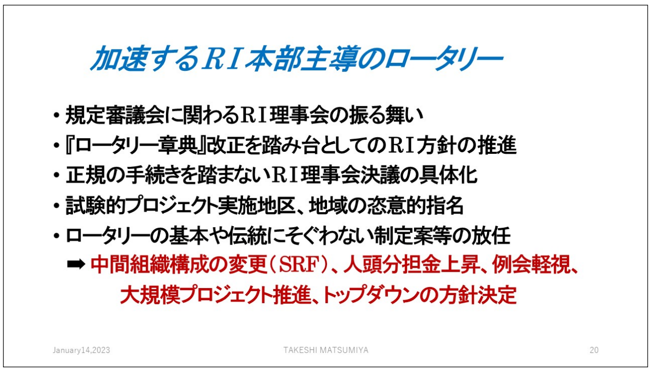


Slide 19

この二つの写真は、どちらのカップルも皆さんよくご存知でしょう。Nick & Jennifer ジェニファーの旦那、ニックですね。彼も本当に頻繁にロータリーの会合に出てきて、日本にも来ましたね。ニックはロータリアンです。そして、Marga & John、この写真はカリフォルニアのどかですかね、後ろの白抜きの文字からすると。現在のロータリーの在り様を象徴する人物としてご紹介いた

しました。

いっとき、事務総長夫妻が余りにいろんな場面に頻繁に出過ぎるという釘を刺されて、暫く静かにされていたときもあったんですけれども、現在は、2 人でポリオ撲滅・根絶のためのサイクリング。『ロータリーの友』やロータリアン誌をずっと賑わすようになり、今や小船井さんのお話ではありませんけれども、RI 会長どころではない権限を持つに及んでいるように思えますね。



Slide 20

規定審議会に関わる RI 理事会の振る舞いという点で、RI 本部主導のロータリーに変化させているというという具体例を一つ二つほど、小船井さん。今日は小船井さんにそのような自覚はお持ちではないでしょうけれども、有力な助っ人に語って頂きたいと思います。

国際ロータリー第 2500 地区

パストガバナー小船井修一（釧路 RC）様

「すみません。何回も。規定審議会に 5 回参加しており、規定審議会代表議員世話人事務局やっている関係で指名されたと思います。RI 理事会の振舞いということですが、RI 理事会は先程松宮先生がおっしゃっていたように、『ロータリー章典』を変更したものに関して、改めて組織規程を変更させるという意味で 3 年に一度の規定審議会で、理事会は平均 20 件ほどの制定案を上程します。理事会は規定審議会前に綿密なシミュレーション、リハーサルをしています。松宮先生は 2013 年の規定審議会で理事会提出制定案を理事の立場で提案者として登壇し、制定案の趣旨説明をされました。先生のお話では前日に綿密なリハーサルをされたとのことです。理事会は提出した制定案は全部採択させることを前提として緻密な準備をします。（採択が困難と思われる制定案は事前に取り下げします）また、理事会は各地区から提案された制定案を精査して理事会にとって都合の良い制定案、都合の悪い制定案を選別し「反対の声明」、「賛成の声明」をします。理事会にとって都合の良い制定案を通す為にはルールの範囲の中で全力を尽くすので、その意味では我々も通す為には全力で準備する必要があると言えます。先程、松宮先生がおっしゃっていたことで、一つ申し上げますと、ローターアクトを国際ロータリーに加盟させる制定案の審議で、最初の投票では僅差で否決され、焦った理事会は急遽再審議動議を提出し、再審議動議が採択され翌日の審議会で逆転採択されました。これは、一見理事会の「暴挙」のように見えますが、基本的にはルール上は許されます。しかし、このような再審議で結果が覆った事例は今まで参加した 5 回の審議会では例が無かったことは事実です。一度、否決されて、それでは、もう一回、再審議だと言う事で動議を出しても殆どが否決されます。

ローターアクト加盟制定案の再審議は翌日でしたので、その前夜に歴次全員がロビー活動をしていました。「反対するな」と言う訳です。そして翌日に採択させたというう意味では大きな努力をしました。私は卑怯なやり方をやったとは思っていません。理事会はロータリーの根幹を揺るがすような制定案を提出し、全力で採択させようとしていることを知って頂ければ幸いです。以上です。

はい、有難うございました。私が理事であったとき最初用意していた制定案は 39 件くらいありましたが、結果的に 13 件まで減らしました。やっぱり現実的でないと通る可能性が少ないとか、そういう情報を得た結果、通る可能性の高いものから選び出して制定案として出すという。これ確実なことで、理事会提案が、圧倒的な否定に晒されることは理事会の権威に係わるのであってはいけないと、そういう認識もありますね。これね、先ほど言いましたが、『ロータリー章典』に先に掲載して、その後それを踏み台として制定案を策定し、規定審議会に提出した結果、変更されるのは組織規程のほうであって、『章典』は変更されないという、そういうことが、しばしば

起きています。先程のスライドにありました RI 理事会の勇み足というものも、「3H プログラム」というものと、それから「75 周年記念基金」というものをね、ああいった金額で設定して発表する場を審議をする場ではなくて、国際大会という場でしかも報告の形でやったということも同じ態度の現れと理解できます。

試験的プロジェクト。これ、SRF なんかは、今、二つのゾーンが規定審議会で決まったんですよね。その二つのゾーンというのは、オーストラリア・ニュージランドというゾーン８と、それから RIBI。どちらも共通しているのは、圧倒的に会員減少の進んでいるゾーンであるということは、確かですね。そういうところを指名することによって、会員増強という実績をパイロット期間中に示してくれれば、そこで示されるであろうプランを正規のものとして実施していって構わない、という判断の上でスタートが切れる状況を得られる。そうすれば、ある意味恣意的なゾーンの指名を当然の考慮としてすることもできるわけです。先程お話しできませんでしたけれども、規定審議会の場合も制定案を理事会から提案するのではなくダミークラブに制定案を委ね提案させるということも、過去、具体的に繰り返し行われてきました。

ロータリーの基本や伝統にそぐわない制定案等の放任。この意味、お分かりいただけるでしょうか？例えば、毎週１回の例会じゃなくて月 1 回でも良いんじゃないかみたいな制定案は、再検討も促さず黙って制定案を出させる。出しても理事会は反応せず、放任するということによって基本が崩されていくことを、RI の方針を推進するための一つの手掛かりにもしているということなのです。この具体例は数多くあります。規定審議会の採択に委ねて理事会としては何もしないことによって元来の基本は崩れていくに任せると言う事です。

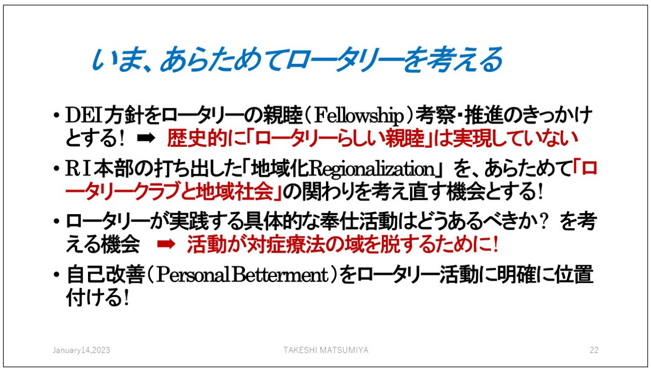
これから理事会がやろうとしていることは、SRF、中間組織構成の変更。これは、基本的になにゆえに出てきたかというと、今の地区ガバナーというものが機能していないと RI 理事会は見ているわけです。だから、どうしたらよいか。なにゆえに機能していないかというと、やっぱり、会員を増やすという点、寄付を集めるという点、それから大きなプロジェクトを推進していけるかどうか、そういう点について地区ガバナーが十分な力を発揮できていないので、そういう部分、地区も含めて変更していこうとしているわけですね。

人頭分担金なんかは審議会の度にどんどん上がっている。ライオンズクラブの年会費は恐らくロータリーの半分くらいでしょう。今ロータリーが 70 何ドルですよね。2 ドル上がるのかなとみていると審議会中に改正案として提案し 4 ドル上がるとか、そういうことも規定審議会でありました。国際ロータリー理事会は、例会を基本的に軽視しているので、出席についてほぼこだわりがない状況にあります。奉仕活動をやってくれたほうが良いし、会員増強して、寄付を沢山して納めてくれたほうが有難いんでしょうね。いろいろ皆さんにもおっしゃりたいことがおありとは察しておりますが、先に進みます。

Slide 21

ここから、一番最初の「いま、あらためてロータリーを考える」というところに戻るためにこの一枚。これは、シカゴ郊外の写真ではなくてポール・ハリスが好んだバーモンド州のグリーンマウンテン山脈の連なるところの写真です。ポール・ハリスが『This Rotarian Age』という書物を 1935 年に出していますが、その 4 章のタイトルは「市俄古より何の善きものか出づべき ?」という、これはもともと、「ナザレより、何の善きものか出づべき ?」という聖書の言葉なんですね。ヨハネ伝です。1 章 46 節だと記憶しています。「ナザレ」という聖書の地名を「シカゴ」（市俄古）に代えた。ナザレから出てきたものは人の子、神の御子イエスですけれども、市俄古が生んだものはポール・ハリスのことを言っているんではなくて、ロータリークラブという組織を言っています。ここからは創始者であるポール・ハリスの思いを念頭に

したうえで、ロータリーの今とこれからを考えて行きたいと思います。



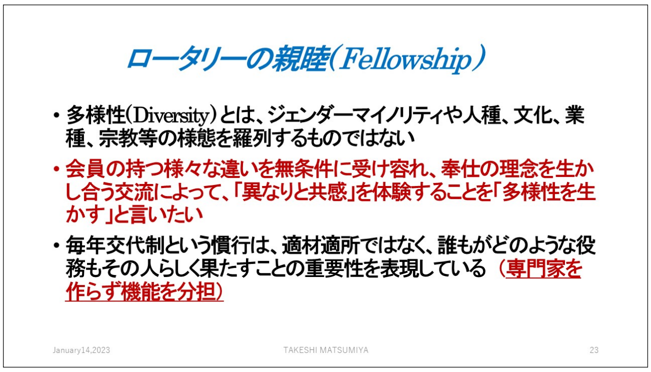
Slide 22

我々、先ほど御意見もありましたが、DEI 方針というものを単に拒絶するということではなくて、DEI 方針をロータリーの親睦を考察・推進するきっかけの議論をしていったらどうか。先程、部分的にはお話ししましたけれども、私は歴史的に「ロータリーらしい親睦」というものは実現していないと思っているんですね。先程も言いましたが、 退会しようとする仲間がいても結果的に止められないし、退会の本当の理由も知らないという友人関係のまんま終る。そうではなく、もっともっと親しい関係といいますか、仲間だから議論し合える、何でも率直に言い合えるというそういう土壌を親睦の中に育てていかないといけないと思うんですね。また、国際ロータリー理事会は、地域化ということを持ち出していますが、具体的には未だにどういうこととなるかは分からないのですが、単に新たな情報を待つのではなく、「ロータリークラブと地域社会」の関わりが如何にあるべきかを現実に、我々の日常の事柄として考え直したり、議論していったりするというものがあっていいだろうし、そのことにエネルギーに費やしていくことも大切だと思います。さらに今日この場で取り上げたいこととして、ロータリーが、過去にほとんど議論の俎上に載せることの無かった「ロータリーが実践する具体的な奉仕活動はどうあるべきか。」という課題です。例えば、ボーイスカウトに対しての毎年の寄付とか、30 万円ずっと寄付を続けてきたけれど会員が減少し、30 万円を 10 万円にしなければいけなくなった。でも永年の事でもあり、相手側は、すでに予算化してもいる。逆に何故と問われる事態も考えられる、というような。そんなことも現実にあるわけで。じゃあ、本当にロータリーが実践する具体的な奉仕活動はどうあるといいんだろう。活動が対症療法の域を脱するために。極めて重要な事ではないでしょうか。この後お話しようと思っております。

パーソナルベターメント自己改善というロータリーの基本が、国際ロータリーではずーっと不問にされていて、もうそんな課題はすべてのロータリアンが、それぞれ過去に、或いは入会に先んじて克服している人たちの集まりであって、もっぱら奉仕活動全般、特に大きなプロジェクトにこそそのエネルギーを費やしてもらいたいと考えてでもいるかのようです。でも、そうでしょうか？

【コラム４】　平凡なる非凡人：

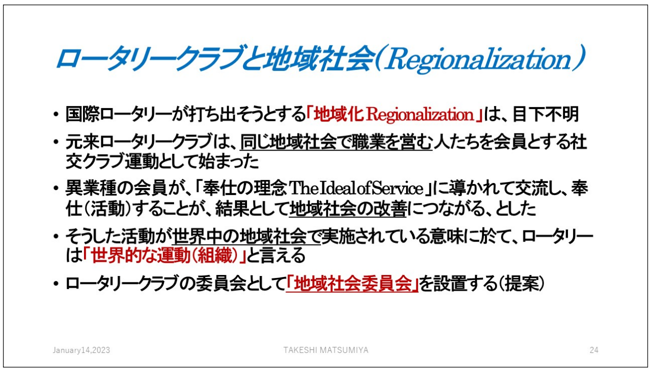
『The First Rotarian』(James P. Walsh 著 1979 年刊)の「はじめに」で著者ジェームズ・ウォルシュは述べています。「1947 年 2 月 11 日火曜日、Paul P. Harris が世を去って二週間後に、ロンドンのかの壮麗なセントポール大寺院で追悼礼拝が行われた。…この日、説教を行った首席司祭は、コリント後書第 6 章 9 節から“人に知られぬ者の如くなれども人に知られ”という言葉を聖句として選んだ。司祭が選んだ聖句ほどこの場に相応しい聖句は考えられなかったであろう。1905 年に世界最初の奉仕団体を創始した人物の名は、追悼礼拝に代表者を送った何十万ものロータリアンにはよく知られていたが、世間一般には今なお知られていないからである。」正に、ロータリークラブの存在と軌を一にしているようです。私は、それでよいのではないかと考えています。



Slide 23

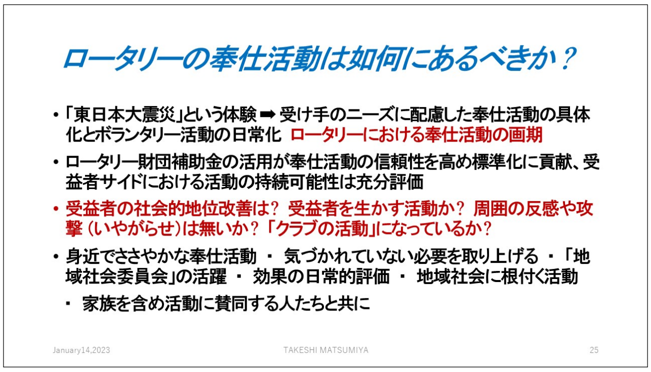
ロータリーの親睦、フェローシップということになってますよね。だけどやっぱり様々に誤解があって、フレンドシップとか懇親会を中心にしたような活動とか、ゴルフなどの遊びに費やすような親睦活動、仲良しクラブであればそれでいいのでは、と捉えている傾向もあるかもしれません。それに関連して、私が今も思い出すのは 2007 年の RI の研修リーダーだった時の各国の研修リーダーとの研修でテーマとして取り上げられた「多様性」についての議論です。多様性は現在もそのようにしか扱われていないように思えるのですが、ジェンダーマイノリティ（LGBTQ）や人種、文化、業種、宗教、そういった様態を箇条書きにしてそれで済むものではない、様態を考えられる限り挙げれば多様性を語ったなどというものではないと、元々思っています。つまり、多様性というものを活かすというところまで含めないとロータリーの多様性とは言わないと、私は、その時に、2007 年の研修リーダーだけの協議の時にそういう発言をしたんですね。会員の持つ様々な違いを無条件に受け容れる。つまり、以前のロータリーには、先にも述べましたが、「会員選考」というシステムがあったことを長く会員でおられた方はご存知だと思うんですね。「入りたい」と言ったから入会できるものではなかった。その選考という壁を乗り越えて入会した。その会員の持つ様々な違いを、それでもクラブは選考基準の縛りをもって選んだんだから、クラブ側がね、無条件に受け容れて、奉仕の理念を生かし合う交流によって、異なり、違いと共感を、その都度いろんな場面で会員相互が体験していくということを含めてこそ多様性の名に値すると私は思ったんです。つまり、多様性。違いというものが、クラブの活動のなかで活かされてこそ、多様性は多様性の名前に値すると、そういう主張をしたわけですが、その拘りとも言える思いは今も変わりません。奉仕の理念 The Ideal of Service 適用の絶えざる心掛けあれば、ロータリーらしい親睦 Fellowship 実現の可能性が開けるのです。そうすれば、いま叫ばれている E（equity)、I（inclusion）を敢えて持ち出す必要が無いと思うのです。

それから、ロータリーの親睦につきましては、「巧妙に作られた親睦の構造」というタイトルで私が地区ガバナーであった 2004～2005 年度の月信 8 月号に書いた内容を是非ご参考いただきたいと思います。それは、一業種一会員制、毎週 1 回の定例例会への規則的な出席、それから会費同額、それから機能分担制の役務などロータリーの長い慣行としての基本原則に導かれる親睦の在り様を論述いたしました。今一つの慣行として毎年交代制の意味も述べたのです。今は全く否定される運命にあり、理解もされないのでしょうが、毎年交代制の意味というのは適材適所とか、週報なら週報作成に長けた会員が毎年同じ役割をやるというのが、ロータリーの在り様ではなくて、誰もが一年毎に交代でやっていき、その際にその人がその人らしく得手不得手を問わずやる事を良しとするのがロータリークラブの親睦に支えられた役割の分担という風に、私は、ずっと思っています。そういう意味では、結果として「専門家を作らない」という、ここに毎年交代制の意味が、重要な意味があったものと思います。今や国際ロータリーもロータリークラブも、日本の会員のほとんどの方々の専門的な奉仕活動、人道的奉仕活動の企業体とまでは言いませんけれども、専門家団体、専門奉仕団体だという風な認識でないとなかなかついていけないほどに、奉仕活動を前面に打ち出し、会員相互の交流というものはどちらかというと忘れられている。ロータリーの親睦を、やはり、もう一度考えなおすことによって、ロータリー全体を生き生きとした活動にし直すことが出来ればと考えています。



Slide 24

地域社会ですね。この国際ロータリーが打ち出そうとする地域化 Regionalization は目下パイロットゾーンは決まりましたけれども、そこでの活動と RI の指導を受けてどういうものが提案されるのか、これからということになります。元々ロータリークラブというのは、私は、地域社会のものだという認識を強くもっていましたし、今もそれは基本的には変わりません。同じ地域社会で職業を営む人たちを会員とする社交クラブ運動として始まった。で、その始まったものをそのままの形で 100 年 200 年続けなければいけないと言っているわけではありませんが、そこの意味も一つ考えていかないといけないのではないかなと。同じ地域社会を背景としてクラブ活動というものが営まれているかどうかについては改めて議論していくべきだと思う。異業種の会員が、奉仕の理念 The Ideal of Service に導かれて交流し、奉仕活動することが、結果として地域社会の改善につながる、それがロータリー運動です。今は、オンラインも E クラブというものもありますから、はるかヨーロッパの国に会員がいたりということもあり得ますから、そういう現実も勿論否定できませんが、ロータリークラブの基本的な背景としての地域社会にどうアプローチするか、どういう関りを持つかという点は、改めて考えて良いのではないか。それは奉仕活動を考える場面でも当然ですね。そういう活動が先にも触れましたように、活動が世界中の地域社会で行われているというところをもって、私はロータリー は世界的な運動（組織）団体であると、そういう言い方をしたいわけです。で、なおかつ、「ロータリーの目的」第 4 項を見て頂きますと、奉仕の理想に結ばれた職業人の集まりを通じて、と書いてあるわけですから、つまりロータリアンのことしか言っていないのですから、ロータリーが語る国際奉仕がどのようなものかを再確認して頂くことも大いに大切です。第 4 項はそうした理由から「目的」の中で明確に視点が異なっていることを是非ご理解いただきたいと思います。地域社会を意識した上での私の提案は、「地域社会委員会」というものが、つまり従来の社会奉仕委員会ではなくて、現実に地域社会の活動に参加するような委員を含む委員会を、ロータリーは、クラブは、有していても良いんではないかという、そういうこだわりをもった主張なんです。委員は地域社会の会合に参加するという立場を備えていることが要件です。



Slide 25

ロータリーの奉仕活動。

親睦のことをお話して、地域社会とのかかわりをお話して、此処では、奉仕活動は如何にあるべきかという課題を考えましょう。日本にとっても世界にとっても、「東日本大震災」という体験は非常にロータリーが実施する奉仕活動というものに、画期的な変更をもたらした。それは、ロータリアン全員の自覚のもとにそういうことが行われたということで、やっぱり大変な、災害であり体験であったと思うんですね。原発被害も含めてですね。過去は、場合によっては思慮に欠ける、先ほども言いましたような、ボーイスカウトや少年野球を支援するとかね、それで良いのかなということの厳密な議論を経ないでやってきた奉仕活動。だから義務的な奉仕活動に近いようなものをロータリークラブが多くのところでやってきたわけです。前年踏襲を含め、何十年も同じ活動を続けるなど、そういった活動を続けていたでしょうけれど

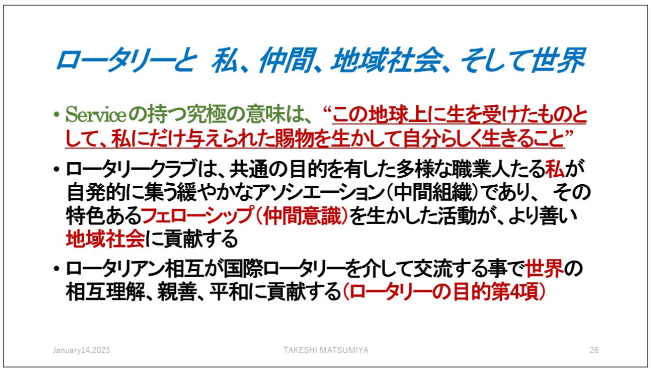
も、勿論適切な奉仕活動も実施していたことも事実ではありますが、この東日本大震災という体験は、受け手のニーズというものを最大限把握したうえで、現地にも赴いて、本当に実質的な奉仕活動を実施することができるようになったという意味で、ロータリーにおいては非常に画期的な出来事だったと思います。ただ、その一方で、福島のある町の施設に対して、これこれの奉仕活動を毎年実施しているから他のことはやらないよみたいなね、そういうことも生まれたんですね。非常に意味のある活動を続けているのだから注文を付けられる筋合いはないといった。そういうある種の弊害も同時に発生させもしたのが東日本大震災という巨大な体験でした。

それから、財団補助金の活用、シェアシステムが登場するのは 1992～’93 年頃でした。そのシステムによって、3 年前の寄付実績のほぼ半額が地区に戻ってきてそれをどんな風に使うかという自由度のある活動ができるようになり、また、その補助金の活用法が RI でシステムとしての枠組みも整備され、それをクリアしたうえで活動できるということで信頼に足る奉仕活動が為されるようになりました。これも非常に評価できることであると思います。ただ、私が言いたいのは赤字でお示ししているところなんですね。つまり対症療法、マイクロクレジットをある東南アジアのある国の小さな村でそういうものを実施すると、持続可能性というものをシステムが問い掛けてきますから、それに対しても対応しなくてはいけないということで、きわめて持続可能な信頼性の高い、受け手の課題を包み込んだ良い活動にできるようになってはいるんですけれども、他方、じゃあ、そういう支援を受けた村が周辺の同じような村からある種の嫌がらせではないですけれども、お前の所だけみたいなね。そういう妬みによると思えるような現実が存在するということを聞きます。こうした現実を皆さんは、ご存知でしょうか？これは訪ねてみないと分からない事かも知れません。なおかつ、当事者である受益者の人たちの、地域社会のなかでの立場が以前より良くなったのか。活動は持続するけれども、彼らの地位はあまり変わらずで貧困から抜け出すことは出来ない。周囲の目も事業実施以前の同じ眼差しで受益者の人達を見る。そういったことに対してもロータリーの奉仕活動であるなら改善すべく動くべきだと思うのです。活動は持続し、そのうえで彼らの社会的地位もささやかでも改善に貢献したというような。そうしたこともロータリーとしては、奉仕活動の視野に入れるべきではないだろうか、というのが、私のロータリーの奉仕活動という場面での必要な視点と主張です。そうでない結果的には中途で頓挫している活動もあるのです。続いているけれども、始めたときのように続いているかどうかが疑わしいものもある。そこまで活動を評価し切れていない。少なくとも、国際ロータリーは、それを課題として、問題として申し出があればそれに対処するということになるでしょうけれども。

改めて、もっと身近でささやかな奉仕活動。印象的なお話をしましょう。私が理事の時にテキサスの研究会に参加いたしました。研究会の参加者は、日本で見るようなガバナーエレクトやガバナーの配偶者がいてというのとは違って、多くの家族も来ているんですね。そこで、いろんな人からお伺いした時の話としては、奉仕活動の概要を決めるのは、確かにロータリアンであり、クラブなんだけれど、そのプロジェクトの具体的な方策として募金をしたり、活動を担ったり、広く誰か賛同してくれる人を募ったりとか、そういう運動をしているのは、まさに家族だとおっしゃるんですね。本当にどのようにしてこの活動を担ったか、というのはロータリアンである主人あるいは配偶者も知らないかもしれないが、私たちは、よく分かっていると。そういう活動をテキサスでは多く実施している事がよく分かりました。具体的なクラブの奉仕活動も、家族を伴って実施する。だから、ささやかなんですが、そのための予算というものもなくて、そのためにいろんなこと、オークションをやったり、バザーをやったり、いろんな方法を駆使して活動をやって資金を得て、それを具体的な奉仕活動に使う。そういうエネルギーを家族と共に使っているんですね。見習う必要があることではないでしょうか。

それから、ニーズがあるからそれに応える。だから、主張者がいてどういうニーズがあるかを聞くということに終始しないで、ロータリアンだから気が付く地域社会の光の当たっていないところというものを活動として取り上げる知恵は、やっぱりロータリークラブには必要だと思うんです。地域社会に根付く活動にしたい。だから、

先程言いました地域社会、クラブの「地域社会委員会」が地域社会の活動、会議に具体的に参加する。そういう中で意見を交換し合うことを通じてやるべき課題を見つけてくる。市の現実的な実情。何がどうなっているのかを視野に入れて、「地域社会委員会」が活躍する場面は多くあるのではないだろうかと思っています。家族を含めて活動に参加する人たちは多く居られるにも拘らず、そうした声がけをすることも無く、日本のロータリーは一言で言えば、「亭主のロータリー」であったわけです。亭主だけが街頭に立って募金していたり海岸のごみ拾いをしていたり。そういう閉鎖的な活動ではない、もっと豊かで地域社会を巻き込んだ活動をクラブとしては十分、やっていけると思うんですね。そういう点でもクラブの奉仕活動がどうあるべきかを考え、見直していかないといけないと思います。

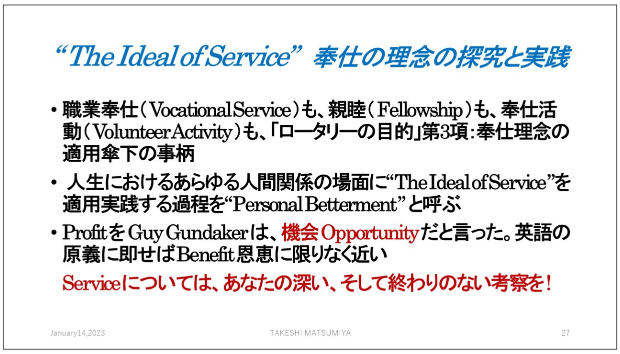


Slide 26

これは、ちょっとロータリーを斜めからみる。客観的にみる。というんですかね。私なりの、Service ということについて抱いている確信的な考えは、これですね。“この地球上に生を受けたものとして、私にだけ与えられた賜物がある、それ故私は誕生したと思うんですね。その賜物を生かして自分らしく生きること”をサービスと、私は今そう言いたいと思っています。人のためにとか、思いやりとかそういうことをいうのではないのです。それは、結局２項対立の中での考えの振れを示しているだけであって、実質的な活動そのもののことを言おうとしたら利己、利他のどっちかの度合を膨らませて語ったり、他者への利益を殊更大切だとして、と言ったような考えは、私は service の本質を正しく伝えていないと思っています。２項対立という枠組みはなしに service 本来のあり様というものを考えたいなと。そんな奉仕の理念を探究するという、素朴ではあるが真正直な努力をしてみたいと思っています。それは出来上がったと信じている言葉の体系に限界があることを自覚する事でもあると思います。ロータリアンは、共通の目的を持っています。「ロータリーの目的」ですね。共通の目的を有した多様な職業人たる、複数形の私が自発的に自主的に集う緩やかな、緩やかなとは、ルールは最小限で良く、個人の自由を広く生かせるという意味を私は込めています。あまり縛りの強いルールというのはロータリーにはそもそも馴染まないと考えています。夫々の会員の自由を保障する限りのものでなければならないと言う事です。そういう緩やかな中間組織であって、その特色あるロータリーの親睦（フェローシップ）を生かした活動がより良い地域社会に貢献するという主体としてのロータリークラブ。それは皆さんが、皆さん流のこだわりの中で本当にロータリークラブは何だろう。少なくとも、国際ロータリーも、前半にでも触れましたが、ロータリーの核心は一つ一つのロータリークラブなんだということに尽きます。そして、正面から誠実に考えることは必要です。

国際奉仕に関する考えですが、これは、繰り返しになりますが「ロータリーの目的」第 4 項は、奉仕の理念に導かれた、あるいは集う、職業人同士の交流を通じて世界の相互理解、親善、平和に貢献するという風に、文言もそのようにしか書かれていないことです。それを、ロータリアン以外の人たちと一緒にという感覚では、どうしても読めないと思います。どうでしょう？

改めて、お帰りになって読んで頂きたい。奉仕の理念に結ばれた職業人ですよ。それはロータリアン以外にないのではありませんか。



Slide 27

互いの幸せを考え合う、そこで止まってしまわないで、もっともっと service というアイデアについて突き詰めていこうと私は考えています。我々少数のグループで「奉仕の理念を探究する会」という名前をつけて活動をささやかに始めているのですが、これは結局、際限のない人生の課題といいますか、普遍的な哲学的課題だと捉えていると言う事でもあります。しかし背負いきれない課題であるとは考えておりません。普通の人間が当たり前のように人生を歩むとき、避けられない課題であると同時に誰もが抱えている課題に違いないからです。要するに特別なものではないと言いたいのです。

いのちのあり様と直接関わっていると、私は service を捉えています。職業奉仕も親睦も、奉仕活動も、「ロータリーの目的」第 3 項：奉仕理念の適用傘下にあることは皆さんもご承知の通りです。

また、第 3 項が正面から語っているのが、人生のあらゆる場面で、いわばすべての人間関係が生ずるそのたびごとに、奉仕の理念というものを適用しましょうと目的には書いてあるにもかかわらず、国際ロータリー理事会も、本部の方針としても、具体的に奉仕の理念をロータリアンの重要な核心をなすものであることを示し、議論する場を提供したことは、少なくとも 21 世紀に入って一度たりともないと。可笑しいとはお思いになりませんか？

また、今日の講演では三度ガイ・ガンディカーの言説を使いますけれども、彼は Profit のことを機会 Opportunity だと言ったんですね。『ロータリー哲学』を著したアーサー・フレドリック・シェルドンは、その著の中で、Profit は純粋な金銭的な利益でいいんだ、ということを強調することで経営者の多くを惹き付けました。けれども、シェルドン自身の本意としては金銭だけではないものも当然含まれているということを理解し尽くしていたことは確かですから、彼ら二人の核心に照らせば、Benefit (恩恵)、我々が受ける恩恵、それを Profit と捉えていた。ロータリアンであるからこそ受けられる機会と恩恵というものも、Profit という言葉の理解と共に問われたと私は思っています。

ここでは大変偏った勝手な話をしましたから、Service については、皆さん方の深い、終わりのない考察をしていただきたいと思います。これでだいたい終わりだと思うのですが、

Slide 28

最後のスライドです。『This Rotarian Age』 というのは、この私たちのロータリーが本領を発揮する時の事であり、それはこれからだ！と言いたいのです。日本語訳は米山梅吉さんによって「ロータリーの理想と友愛」というタイトルになっていますが、今後、それも極めて近い将来、「ロータリー時代」といわれるような時代を私たちが築くために一番の核となり、多くの人達の人生の拠り所となるものとして、「奉仕の理念」がロータリーにおける議論の中心を占めるものでなければならないと思います。「ロータリーの目的」をロータリアンの共通基盤として戴いている限り、「奉仕の理念」がその最重要の座を他に譲ることはありません。原語である Service の探究はどこまでも終わることは無いのです。

以上で私の話は終わりますが、全般を通じての質疑をお受けしたいと思います。

質疑応答

松戸東 RC 会長エレクト石田庄一郎

ご指名、ありがとうございます。松戸東 RC の石田と申します。よろしくお願いいたします。今日は、大変貴重なお話どうもありがとうございます。私、ロータリーに入って 9 年なんですが、9 年の間に RI のほうでいろんな仕組みというか、変えられてきたという話をお伺いしまして、例えば 1 業種 1 会員のところが、例えば、複数ＯＫになったとか。例えばメーキャップも、期間が変わったとか。RI のほうで、変わってきていると思うのですが、例えば先程来規定審議会の議案とか、あと『ロータリー章典』の方も勝手に書き換えられているとか。そういう話を頂きましたが、それを阻止する方法というのは、何かあったりするのでしょうか。教えていただけないでしょうか。

これは非常に困難には違いないのですが、そういう考え方の仲間をやっぱり増やしていって、少なくとも伝えるという機会を、さらに、規定審議会とかだけではなくて、つまり、制定案を提出するということだけではなくて、決議審議会というものも毎年行われております。そうしたあらゆる機会を通して訴えることも勿論大切です。決議審議会に対しては、どのような議論をロータリー全体でやりたいのか、という要請を理事会に提案するということも可能です。ですから、公式の場を最大限利用するということもあり、国内で理事経験者だとか、RI の役員、1 年に 34 人ガバナーが出るわけですから、彼らはその年度 RI の役員ですから、そういう人たちを介して理事会に建議案を提出する方法もあるでしょう。一緒になって意見を RI に対して伝えていくこと。そうしたアクションをあっちでもこっちでもやりという、頻繁で、且つ地道な作戦を繰り返していくしかないと思うんです。そうでないと、大きな意味では、単に形式的な機会を利用していくだけでは、なかなか困難。破天荒な展開をしていく。仲間を増やし、その輪を広げていくことが欠かせないと思って、それこそ、初めは本当にささやかな所から小さな仲間で始めようとしています。まだ、諦めたくない。

千葉中央 RC 副幹事矢野憲治

千葉中央 RC の矢野と申します。今日はためになる話をありがとうございます。そのなかで、ひとつ感想と、疑問を二つ申し上げます。まず、私のロータリー歴 5 年なんです。新しいんで、なかなか、先ほど松宮さん言われたように、自分のクラブのなかで求めるものが無く、そういう感覚の中で RLI に出て、非常にロータリーの不安さを感じて、先程松宮さん言われたとおりで、同じような感覚を、松宮さんみたいに日本のロータリーを引っ張っている方が僕と同じ感覚じゃない、という同士を得た感じになりまして、非常にありがたいなと勇気を頂いた感じです。これ、RLI で育んだロータリーの知識と知恵をですね自分のクラブに持って帰ってなんとかせな、いかん。そういう思いをふつふつと、自信を持てました。本当にありがとうございました。

それが一つ。もう一つはですね難しいところなんですが、最後の話で、ロータリアンというのは私だけに与えられた賜物で、活かして自分らしく生きるという話がありましたけれども、私は、自分らしく生きることが、奉仕、つまり利他の心というか、それと結びつかないとすら思うんですよ。やっぱり人間が、人間らしく生きると、それ、性善説で素晴らしい人物、人格者であれば自ずとそちらにいくかもしれない。しかし、普通は、大体皆さんが、悪魔と、天使がいるような、ある人間の話ではやっぱし足かせとして、利他の心、つまり奉仕の心というものを打ち込んでいかないと自分らしく生きるというだけでやっていたら、水が流れるがごとく、楽なほうへ楽なほうへいい加減の人生を歩むのではないか、そんな風なちょっと違和感の感じで、本日の話で。

よく分かりますそれは。私がいっているような service という言葉の捉え方をしている人にはまだお会いしておりませんので、全く自分で勝手に語っていることなんです。でも、やっぱり生まれたという、これは特別な神様を信仰している訳ではありませんが、この大自然のなかで人間として夫婦が、いかに細心の注意を払って、いろんな道具を駆使して作ろうとしても子供を誕生させるこ

とは、できないですよね。それは、明らかに人間を超えた力によって私たちは誕生しているとしか言わざるを得ません。誕生したからには、なおかつ 70 億、80 億という人間が地球上にいるわけですから、みんなひとつの賜物を託されて生まれたんだろうと思う、思いたい。その生涯、その託された賜物に気付かない人もいれば、早く気付く人もある。自分の生きていることの意味ということを考えるということから逃れられる人間は基本的にはいないものと思います。そうすれば、自分の振る舞いは他者との関係性のなかでどうあるべきかということを常に試行錯誤し、そういう繰り返しのなかから、これは、私だけが持っている特質であり、それが、時に人に力を与えることもある。もしかするとこれが私に与えられた賜物かも知れない。そんなことを実生活の中で気付いたり、直観として受け止めたり、そこは、分かりませんけれども、人生の何処かで人間は知るのではないかと思っています。信仰として、一人にひとつの誰にもない賜物をもって生まれてくる。それでなければ、この大宇宙のなかで存在しているという意味が基本的にないように思える。生まれた人にはひとつのその人の役割が、この世で託されている。その生命は、結果的に短いこともある。どこかで事故という形で生を終えてしまうこともある。そういう人、世の中にいっぱいいますよね。もう、自分の思考が働く前に命がなくなった人もいる。戦火の中で何も活かせていないままに死んだ人、そういう人も沢山いるわけです。だから、信仰が必要かも知れません。みんな一つずつ与えられているんだというそういう信仰に近い自覚の中でロータリーを位置付けられるのであれば、service は,それをより良く活かすことに違いありません。そういうことによって、自分が今、ここにいることの意味は自ずと決まっていくだろうと。ロータリアンは皆さん、かけがえの無い貴方だけの賜物を此処まで育んでこられたわけですから、この先、皆さんが、皆さんらしく生きるということを十分に考える中で、ロータリーというものと自分の人生との関わり合いを、いま、あらためて考えていただきたい。そういう願望です。

人が自らの自らだけの賜物に気付くことは、気付きの時の早い遅いに関わりなく人生における究極の課題である。ですが一般的に極めて困難な課題でもある、と申し上げておきます。

千葉南 RC 金親弘榮

千葉南 RC の金親と申します。今日はどうもありがとうございました。今日は先生のお話を聞いて、本当に日本が、日本のロータリーというか、千葉のロータリーというか、ガラパゴス化しているということで、世界の潮流と違う、I serve と We serve の違いをちゃんと理解しろと言われて、30 年前に入会したんです。今、そういう話を聞くと、We serve が優先して、自分の仕事場での社会奉仕だとか、あまり見当たらないように思うのですが、間違いなのでしょうか。

あの一。なんていうんでしょうか。団体で一緒に活動をするということを We serve という自覚のもとに考えておられるんだったら、そこはスタートから考え直されたほうが良い。と思うんですね。自分のクラブの奉仕活動のなかで、何を担って、自分なりの役割を果たし、その目的をどのように理解するかということが、私は、I とか We とか言いたくないんですね。それから、何とか奉仕、何とか奉仕という区別も要らないと思うんです。Service というものが示しているのは、要はどんな場面であれ、私流の言葉で言えば、あなたが、あなたの賜物をその団体の中でちゃんと活かそうと。それ以外には何もないの、We serve も I serve もなければ、国際奉仕も、社会奉仕もない。

ロータリー自体は、本来は、 I serve 具体化して・・・・・・

そこは、間違いだと思います、はっきりいって。何故かというと、歴史的に、ロータリーではなくて、ライオンズクラブを作る時に、ライオンズクラブはひとつのモットーを We serve というものを掲げた。その結果、1 業種 1 会員制にこだわっているだとか、そういう閉鎖的なロータリーを見て We serve と言ったことに反論したロータリー側の公式ではない言葉が I serve だと思うんですね。

ああそうですか。何か、よく分からないですね。

We serve も I serve もないというのが、私の。そこは、根本的に全く serve とは何かということが大事ですよね。日常の活動のなかに、I serve ということではなくて、「あなたらしさを活かす」ということが We serve を支える力になっているんでしょう。だから We serve と I serve の区別は本当に何もいらない。

死語ですか。

いやいや、死語ではないですよ。ある考えに留まっている方はずっとそういう事を言い続けていますよね。職業奉仕もそうですよ。自分なりにあらためて消化し、考え直しましょうと言いたいですね。

ありがとうございました。

国際ロータリー第 2790 地区研修系三委員会主催新春特別講演
「いま、あらためてロータリーを考える」
元国際ロータリー理事　松宮　剛（茅ヶ崎湘南 RC）
2023 年 1 月 14 日
於　TKP ガーデンシティ千葉 4F コンチェルト

国際ロータリー第 2790 地区　研修系三委員会
研修リーダー　得居　仁（松戸東 RC・パストガバナー）
職業奉仕委員会
委員長　小野塚　雄（松戸東 RC）
委員　　片岡　雄彦（新千葉 RC）
委員　　三国　大吾（松戸 RC）
委員　　小川　智之（千葉 RC）
ロータリー情報委員会
委員長　山下　清俊（市川東 RC）
委員　　椎名博信（習志野 RC）
委員　　海老原　功一（流山 RC）
ロータリー研修委員会
委員長　始平堂玄昌（千葉幕張 RC）
委員　　山本　衛（松戸西 RC）
委員　　水嶋　陽子（館山 RC）
委員　　木川　正博（市川 RC）